

始

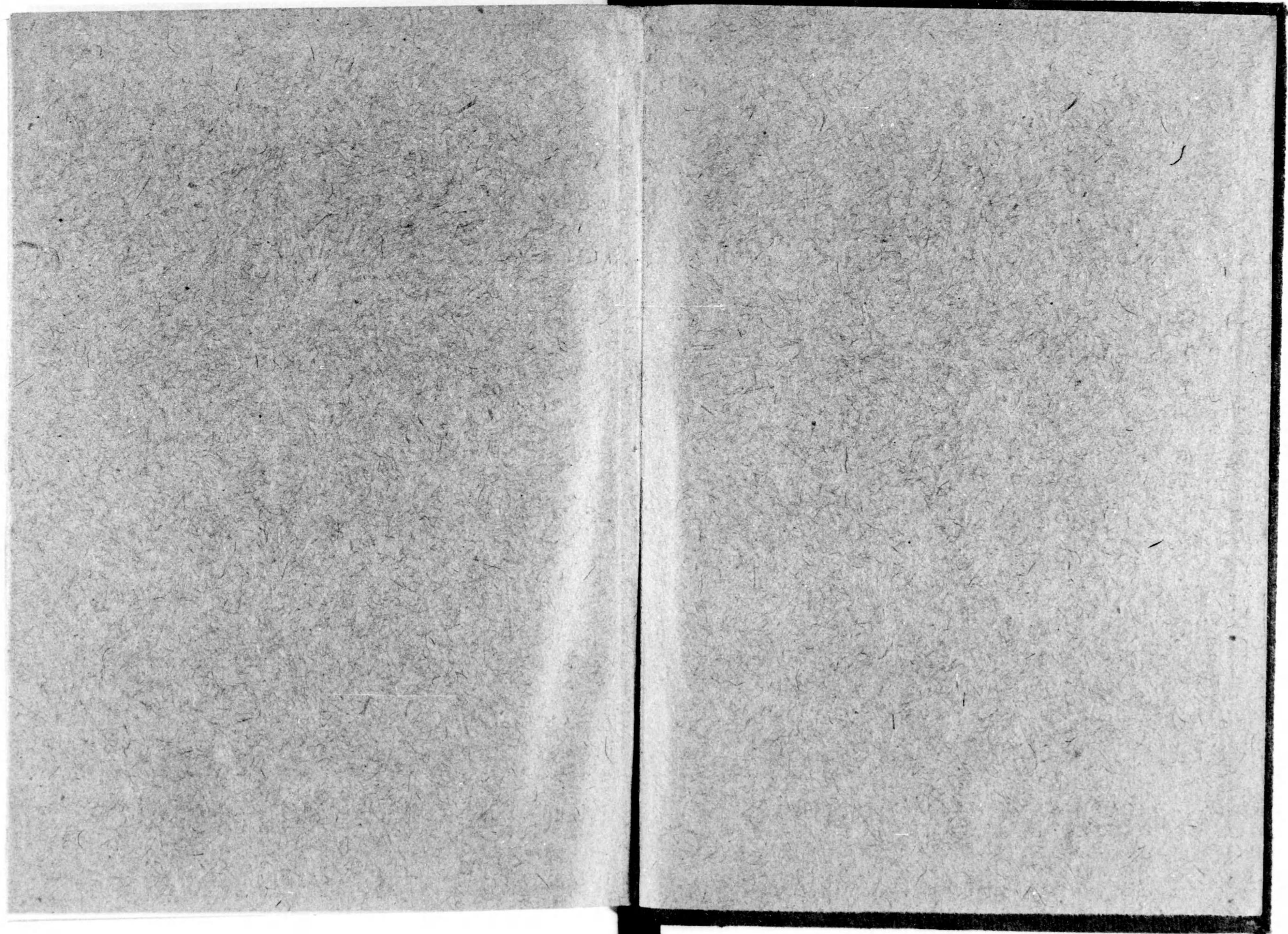


白雲虎隊

牛

白虎隊
武道文庫







文武道

白

虎



隊

六三

1.12.28.

肉交

特101-594



文
士
戯
白

集

初

白 虎 隊

○會津若松城の沿革

幾人の涙は石にそゞぐさも、其名は世々にくちじこそ忠ふ。君の爲め、國の
 ためには家をも身をも打ち忘れ、一死以つて國難に殉せんとするは、吾が大
 和魂の本領なり、本編會津白虎隊の如きは、二百年來義名赫々たる彼の
 赤穂義士にも劣らざる、否寧ろ其忠烈悲壯なるは遙かに勝れるも、只公道
 の疎々として、動かすべからざるものあり。惜しいかな順逆を誤まりたる

凝 香 園 著

に依つて空しく此の十有餘人の烈士を飯盛山上一片の露と消へしめ、其名の赤穂義士に比して聞へざるは、眞に遺憾に堪へず、抑も此奥州會津白虎隊の起りたる遠因と言ふは、彼の嘉永六年、會津は松平容保公の時代に至つて、浦加灣頭米國の海軍大將波里が、其國書を齎して通商貿易を求めてから、徳川三百年、鎖國の夢破れたる日本國中は、宛然、鼎の沸く如き騒ぎになつて、幕府の基礎は漸やく茲に動き始めた、時の御老中にし、思慮深き阿部伊勢守は、急使を以つて是れを京都なる一天萬乘の帝に奏聞し、波里には奏聞中であるから、明年更らに其返事を聞きに來いと言つて一時米國の軍艦を追ひ返し、一方には當時江川に在つた諸侯を召して、徐かに其處置を相談した、當時諸大名の意見は區々で、たゞ水戸の藩ばかりは日本の兵備を整へて、米國の請求を斥ぞく可しと言ふ意見であつた、竟り

國を開くと言ふ開國派の人と、只一圖に追捕へと言ふ攘夷派との二つに別れて、何うしても其説が定まらない、其内にその翌年堀田備中守が阿部伊勢守に代つて、米國の請求を容れ、豆州の下田、北海道箱館の二ヶ所を開き、此處を貿易港として漸く一時の鳴りを靜めた、スルト越へて安政四年米國の總領事は徳川將軍に謁して、右二港の外に神奈川、新潟、兵庫、江戸、大阪の諸港を開いて呉れと言ひ出した、そこで徳川の御大老、御老中其他の役人は種々評議の上、兎に角明年條約を仕様と言ふので一時を延ばし、早速其の趣きを朝廷に奏聞して勅許を乞ふ事になつた、其時朝廷よりは、何分重大な事であるから、尙ほ能く調べた上で、條約をせよと仰せられて勅許をせられなかつた、其内に早や其年も暮れ翌年になると、米國の總領事は豫て約束の時であるからさて、度々條約調印の事を迫り、其

四
 れのみならず徳川幕府には將軍家の繼嗣問題が起つて、一方は紀州の家茂
 公をして將軍職を嗣がしめんとて、一方は水戸の慶喜公を推すことゝ成つ
 たが、幕府中の譯の分らぬ人物、或は大奥の女中杯は、賢命の聞へ高き慶
 喜公を迎へる事を好まず、却つて紀州派の人々を相談の上、家茂公を將軍と
 することに決し、更らに井伊掃部頭直弼をして大老職に就けた、是れに仍
 つて大老職になつた、彦根藩主井伊掃部頭は先づ勅許を乞ふの暇なしと云
 ふので、自分獨斷で米國と假條約を取結び、五港を開く事を約束して其上
 他の諸外國とも同様に條約を結んだのです、サア是れが爲めに世の中は沸
 き起る様な騒ぎに成り、終に井伊掃部頭は其年萬延元年三月三日、雪を
 おかして登城の途次、水戸浪士有村治左衛門、蓮田市五郎等の爲めに、櫻田
 門外にて首を討たれた、是れ杯は井伊掃部頭が時世を見る眼のあつたものと

五
 は云へ、朝廷をないがしろにする其罪であること云ふ處から結果を引いて政治
 向きに失敗、多き徳川幕府を打ち倒して仕舞へと叫ぶ所謂勤王派と、一は徳
 川幕府を助けて天下の政治を治め様とする所謂佐幕派との二つに分れた、勤
 王家の方の説では、徳川幕府なぞと云ふものがあるから天下の政治が二つに
 なつて、井伊掃部頭の様な專斷をする者が出来るのだから何でも幕府を叩
 き倒して、政令は朝廷より一途に出る様にしなければ成らぬと云ふので、又
 一方佐幕派の方では、何も徳川幕府を打ち倒さんでも、其他の方法はあると
 云ふので其れに力癩を入れ、終に將軍を助けて六十餘州の大名と共に帝
 に忠勤を勵まうといふ公武合体論と云ふものが出来たので、會津藩主松平
 容保公は、初の公武合体論者であつたのだ、抑も此松平容保公とは
 如何なるお方であるかと云ふと、先づ會津の歴史から語られば成らぬ、會津

此は舊徳川幕府時代には方今の會津、耶麻、大沼、阿沼の四郡を總て會津と云つたので、當時の福島縣下若松市は、舊會津城のあつた處でありま
 す、此の會津城の周圍は誠に天險をそなへたる北方の要害で、四方には澤山
 の山々が打ち續き、東方には吾妻山、安達太郎山、南方には燧燧、駒ヶ
 嶽、西方は朝草山、飯豊山、北方は盤梯山、高曾根杯と云ふ高山峨々
 して聳へ立ち、此の千山萬岳の間に名高き會津平原があるので、日本にて
 大湖水の一に數へられる、猪苗代湖は此の會津平原の中央に深き碧の色を
 湛へ、只見川、鶴沼川、日橋川の流れば蛭蟹として四方に水運び、會津
 平原を濕してあるから、土地は頗る肥へて、收穫は多く、萬夫不當の要害
 の城であります、又此若松城の沿革を云ふと、第一の領主は葦名氏にし
 て、是れは世々奥州の名族で其頃黒川城と云つて居た、處が天正十七年に

彼の獨眼龍と云はれたる伊達政宗が、此葦名氏を亡ぼして是れを奪ひ、翌十
 八年豊太閤小田原征伐の時、流石の政宗も豊公の威武に服して遂に當城を
 豊臣家に返還した、スルト間もなく豊臣の命に依り、熱洲松ヶ島十二萬石よ
 り、一足飛びに若松城の城主となり、所謂會津百萬石を領したるは彼の蒲
 生氏郷であつたが、氏郷の嫡子にして徳川家康の女将であつた蒲生秀行
 は、藩中で少しく失策のあつた爲め、竟に若松城を召しあげられ、野州宇都
 宮十八萬石に移された、其后越后より上杉景勝來つて百二十萬石を領し、
 東北の守護を命ぜられたるも、慶長五年濃洲關ヶ原の役、石田治部少輔三成
 に味方して徳川家康を倒さんとし、其事に因つて羽州米澤三十萬石に移され
 た、其後に當城の領主と成られたのか賤ヶ嶽七本槍の一人にて、勇名をうた
 われたる加藤孫六嘉明で、此人は二代將軍秀忠公より選ばれて會津城の領

主となり、四十萬石を領して、東北の守りとなつた嘉明の死后一子明成家督を相續したるも、終に事に依つて徳川家より其封祿を取り上げられ、三代將軍家光公の時にいたつて、始めて家光公の御腹異ひの弟保科正之が城主となり、二十三萬石を領して維新の際まで此の松平家の居城であつた、是れ故正之公は全く會津藩の祖先で、二百餘年間の會津藩は誠に此の地方で其基礎が定まつたのだ、此保科正之と云ふ人は、幼名を幸松丸といつてました人で由來秀忠公の御妾お静の方の子で、成長の後信州高遠の城主保科正光の家を嗣がれ、二萬五千石の領主となつて居られたが、天性賢明なる上に極めて謙遜で、其上非常に學問に精を出されたから、實に比例なき英明のお方で、其れ故三代將軍家光公は、僅か二萬五千石の小藩から引上げて最上二十萬石の大名に列せしめ、間もなく會津二十三萬石の大名に

封ぜられた、是れ位位のお方だから、従つて逸話も澤山にある、

○藩祖保科正之の逸話

何しろ正之侯は至つて謙遜な質でいらせられたので、彼の參勤交代の時に日本六十餘州の大小名が、紅葉山千代田城に登り、將軍家の御機嫌を伺ふ時杯には、何時でも最も末席に坐つて居られると云ふ有様であつた、するさ或時將軍家光公がフイツと是れにお氣が注がれて、暫らく會津侯のお顔を見詰められ、見る／＼ハツとお顔色を變へられると共に、シロリツと其上座に坐つている諸大名の面体を臨まれ、非常に御不快な御面顔であつたので、並み居る大名方はハツと思はず首を下けたまひ、脇の下からタラ／＼ツと冷汗を流したと云ふ、是れに凝りて其後は、誰れ一人として會津侯の上

座に坐る者がなかつたそうであり、何しろお腹は異れど御兄弟のことでありますから、將軍家と正之侯との間柄は益々御親密になつて、將軍家は正之侯を可愛がられ、正之侯は又將軍家を敬ひ奉つり、徳川幕府の中でも何か重大なことが出来ると、必らず正之侯が關係をする様になつた。後將軍家光公病氣にて御他界と云ふ際に、他の近臣の者を悉く遠ざけ只正之侯お一人を枕邊に召され、瘦せ衰へられたる御手に正之侯の手を固く執つて家「何うか此身が亡くなつた後は、一子家綱を輔佐して、能く徳川家を治めて呉れ、大事を托するは其方一人である」と云はれた、是れに仍つて愈々將軍御他界後、正之侯は會津藩の政事は一切其重役に任してしまひ、身は白から江戸に出で、殆ど十年間も本國へお歸りなく、眞心を籠めて四代將軍家綱を輔け、徳川幕府の爲めに力を盡された、何しろ徳川三百

年間の昌々は、家康公の建業、二代秀忠公の守成、三代家光公の英斷に仍るので、三代目と云ふ時代が一番に難關だ、

賣家と唐様でかく三代目

杯と云つて、家の潰れるのは大抵三代目が多い、徳川家も幸ひにして三代將軍家光公が稀世の英主であつたから、幕府も其基礎を堅めたものですが何を云つても未だ其當時には、何うかするさ全國諸藩の不平大名が、徳川家に向つて喰つて掛らうとする傾きがありましたのを、何の騒動もなく無事に治めて行つたのは、一に徳川家累代の忠臣の中に、彼の酒井忠勝、井伊直孝、松平信綱、阿部忠秋、杯と云ふ一騎當千の名譽ある人々があつた爲めと云へ、内には又此保科正之侯と云ふ大器量人が控へて居られた結果と云はれば成らぬ、其れ故後世に至つて此の保科正之侯を徳川三百年間

の賢である云ふのも、全く其治蹟の擧つた爲めでありませう、そこで前述べた如く、正之は其幼少の時から至つて學問を好きで、和漢の書物に目をさらして居たが、或時小學を讀んで始めて支那の大聖人孔子の教への尊さむべき事を知り、其後は當時の大學者云はれたる彼の山崎闇齋を師として孔子の教への學ぶと共に、又國學者にて有名なる吉川惟足云ふ人について、吾國神道の學問を究めていたが、其後會津藩に學校を建て、山崎闇齋を師として藩内少年の教育につとめた、是れが後年の日新館云ふ、會津藩の學校の始まりで、此勇壯なる白虎隊の少年などを出した學校であります、そこで此の日新館の學問の流義は何うであるか云ふと、先づ君に忠、親に孝、忠孝二道を專一となし、文武兩道を勵み、上下の分限を正し、驕奢や安逸を戒めることが極めて嚴重で生徒の組は四等より三等、二

等と等級を経て一等に至る順序だつたが、是れは九州薩摩に於ける所謂方限り、或は健兒社の如き制度であつたに相違ない、殊に能く似て居たことは學校での教育が斯く嚴重な上に、會津藩は領主の戒めに仍つて其家庭の教育といふものが、一柔弱と不義を許さないで、自分の家の子供が隣家の子供と喧嘩でもして、泣いて家へでも歸らうものなら、機嫌を取るところか却つて「此の意氣地なしめがッ」と頭から叱り飛ばす様な有様であつたら、其の子弟は實に質素にして剛健、只管ら忠孝節義を旨として、朋友の間柄も極めて嚴格なものだ、おん杯に近づく青年、少年は一切擯斥して其交りをなさず、或は不意杯をする者がある、若武士の面々は其者を無理強ひに地下外れの淋しき處に連れ出し、朋友の人々が其者を取り圍んで耻しめる、尙其れにて悔悟しない者は皆「ソレ殴れッ」と言ふので一擧に殴り懲

らしめる云ふ譯だから、誰れ一人として不義不都合をする者がない。又其運動或はかりそのめの遊戯にも、極途に活潑なこそばかりで、日を定めて一日に二十里内外の山や谷を駆け廻り、其間には馬術、水練、獅子踊り、角力等で、就中相撲などは最も盛んに行はれ、或る一ヶ所に立派なる相撲場を作り、夜に入るに四方から集合して来る藩内の若武士、或は町家の者までも引入れて上下の隔てなく打ち交り、飛入り相撲が盛んに行はれ、暗黒中に四十八手を戦はし、龍躍虎搏の大壯觀を現はし、勝ちを得れば藩中で羨望の的となつた、又獅子踊り云ふのは只だ陣中に行はれた一種の舞樂、其の踊りながら會津の町中を練り歩行く勢ひは、眞に勇壯活潑にて血湧き肉躍るばかり、藩夫も起つべし、悲壯なる舞踏は鬼神も哭くべき程で、忽ち活潑なる心を起しむると云ふ踊りで、總べてあらゆる方向から藩士の剛健なる

氣象を養つて居りましたので、一口に會津の教育云ふと、利を後にして道を先きにて、才智よりは人格を重んじ、云ふよりは行ひを先きにする云ふ流義であつた、此の教育の流義は長く會津藩士の精神となつて、前後二百有餘年の間、會津の武強は天下に其名を轟かした譯でありませう、扱てお話しは前に戻つて、世は嘉永、安政に移り、會津藩主は松平容保侯の時、斯く世は開國、攘夷、尊王、佐幕、或は公武合体杯と云ふ説に分れ、種々入り亂れて今にも外國から幾萬の兵を以つて、吾が日本國に押し寄せん杯と云ふ鼎の湧くが如き騒ぎの内、京都は一天萬乘の帝の御座所として、諸國より集まり来る憂世の志士は雲の如く、スワと言は、直ちに禁裏を守護して徳川に當らん云ふ勢ひだから、徳川將軍家に於かれても、誰れか手腕のある人物を京都に置いて、騒動の起らない様にさせ様と云ふ考へて、先づ

會津の松平容保侯を選んだが、容保侯も當時此の難かしい處にたつて、巧く始末をつけるのは實に容易のことでないと思はれたから、一應はお断りなしたものの、強いての仰せに今は詮方なく、固く覺悟を定めて京都に参込み、其時代の大學者佐久間象山、或は横井小南杯と云ふ先生方の説を容れ、世界の大事は何うしても開國をせなければ成らぬと云ふことを、諸藩に説き聞かせると共に、一口に攘夷と云つて騒ぎまわる人々を鎮めていた、殊に先の帝孝明天皇杯には非常に忠勤をあげ、先帝も又深く容保侯を御寵愛になつたけれども、何分其時分は未だ上下の事情も能く判らず、其上に滔々として潮の如き攘夷の勢ひと、勤王の聲とは凄まじい勢力で、何時しか京都の宮中、宮外にまで擴がり、就いては種々な行違ひ、或は誤解などが行なはれ、何うも思ふ様に權かにはならない、終には公卿方の一

部の人、又は薩摩の島津侯、並びに松平容保侯なその公武合体説も何の効なく、結局薩摩、長州、土佐の二藩士は、何時しか首尾よく一致協力して幕府を倒す計略をめぐらすことになつた、併し只幕府を倒すと言つた處で、未だ其當時京都の守護に任している兵は、幕府方で枝さの柱さも頼む會津と桑名の兵で、先づ第一に此の二藩の兵を退去せしめれば成らず、又一方では徳川十五代の將軍慶喜公より、天下の政權を朝廷に奉還させれば成らぬ、是れは最大の急務であつた、處が慶喜公は豫てよりツク／＼と天下の大勢を見られて、今の時は決して日本國內で騒ぐべき時ではない、何うしても外國との交渉を巧くせれば成らぬと思はれた時に、土佐高知藩山内容堂侯の家臣で後藤象次郎、福岡孝悌の二人が、薩摩の小松帶刀と共に、慶喜公に勧めて政權を奉還する様に説き出した、處が慶喜公は豫て何うしたら

一八
宜からうと思召して居られる處であつたものですから、此の後藤、福岡、小松等の言葉の如く、愈々大政を奉還せれば、徳川幕府を討つ兵が起るに違ひない、然うなれば世は大亂となつて、吾が日本國は内での戦争、又外國へ對しての交渉と、兩方で非常な苦しみをせねばならぬと心附かれたので幕府方の人々の内でも、薩摩、長州杯のやり方に不平な人があつたにも係はらず、政權は奉還すべきものだ云ふ御心から、遂に大英斷をもつて朝廷へ三百年來の政權をお還しした、

○明治の王政維新

三百年來の政權を徳川十五代の將軍慶喜公より、其古へに返つて朝廷へお還しをした後は、いよいよ王政維新の大方針を議する、所謂御前會議が

開かれた、其の御前會議に列なつた人々は、有栖川宮、仁和寺宮、山階宮、其他中山、嵯峨、中御門、岩倉の諸卿、續いて薩摩、土佐、安藝の藩主、並びに薩摩の西郷隆盛、大久保利通、土佐の後藤象次郎、福岡孝梯、安藝の辻將曹杯と云ふ人々で、皆其れ／＼に豪い人ばかり、中にも岩倉、中山、嵯峨、中御門の諸卿、及薩摩、安藝の二藩は幕府を倒そうと云ふ説で、尾張侯、越前侯杯は徳川家の御親戚であるから、此の維新の大方針の席上には必らず慶喜公を出して、日本六十餘州の大、小名の上に立て様とし、土佐藩主山内容堂侯も、又同じく然ういふ考であつた、聽て其内いよいよ御前會議が始まりますると、土佐藩主山内侯はシリ、膝を進めて容、斯く王政維新となるべき今日では、何事も公明正大でなければ成りませぬ、萬一も此の間に少しでも怨みを持ち、又少しでも隔てがあつては、

到底此の湧くが如き人民を威服せしむることは出来ませぬ、今日維新の大
 改革を行なはるゝ曉に、私共は兎角合点のゆかぬことが澤山ある、其
 れは先づ徳川慶喜將軍は、斯く時勢を思ふて大政を奉還し、一圖に朝廷
 へ對して忠勤を勵んで居らるゝにかゝはらず、今日此の會議の席へも呼ばれ
 ないで、萬事幕府を討ち倒すこと云ふ様な精神で事をお謀りになるのは、決し
 て公けの論と云ふことはできませんまい」と言はれた時には、流石の席上もシ
 ーンとしらげかへり、一座をして居られた公卿方、其他諸侯の人々にも、一
 時は絶へて言葉を發する人もなかつたこと云ふ、其内同じ思ひの越前侯も
 此の山内容堂侯の説と同じ事を言はれたので、益々一座はしらげ返るばか
 り、其時當時朝廷方の大立物と成つて居られた彼の右大臣岩倉卿は
 靜かに岩土州侯、又越前侯の言葉は一應道理あつて、吾々共も決して其

れは考へのないことでは無い、殊に徳川家の祖たる家康は、群雄割居、所
 謂天下は麻の如く亂れんとしたる時に、出でて天下の亂れを納めたる功は
 かに朝廷に於ても認められては居るが、併し其の子孫は代々天下の政權を握
 つて、忝けなくも一天萬乘の皇室をしのぎ、且つ嘉永以來徳川家の大老た
 る井伊掃部の如きは、勅許を経ずして縦まゝに諸外國と條約を取結び、
 皇族、公卿、諸侯の皇室に心を寄するもの、並びに民間の志士を幽閉し、
 或は其命を絶つ杯、其の傍若無人の舉動は一々數へ切るべきが出来ない
 又徳川慶喜にして殊に自分の罪を悔ひ改めるの覺悟があれば、直ちに土地
 及び人民を悉く朝廷に還し奉り、自分は其罪を待たねばならぬ、然るに
 今以つて其の事なきは、假令へ天下の政權は奉還したりするも、其の心は
 容易に知ることが出来ないから、左様な心の判らぬ者を、此の大切な席に

列座せしむることは決して出来ぬのである」と云はれたから、大久保利通、並びに薩州の島津侯、長州の毛利侯も、岩倉卿をたすけて是れに同意した。スル。此時、山内容堂侯の家臣、後藤象次郎は此の説を駁して、象恐れながら岩倉卿並びに其他の人々のお説は誤まつてござるか、心得ます、今日岩倉卿其他の人々のされることは實に陰險なごさばかりで、萬事の機を決せんとするならば、山内侯及び越前侯の仰せの如く、何うしても徳川將軍家を此の席に迎へねば成らぬと考へます」と云ふ。鹽俣、議論が區々になつて容易に決しなかつたのですが、遂には尾城侯、越前侯より徳川慶喜公に對し、日本六十餘州の封土を朝廷へ奉還せしむる様説かすに至つたのであります。處で此方、徳川慶喜公の方は、此時何うして居られたかと云ふと一日會津、桑名二藩の不平を無理強いて制へて天下の政權を朝廷へ奉還した

上は、相變らず全國の諸侯の頭となつて、陛下を輔け奉り、重大の事件には必らず召されて、會議の席杯にも無論列ることが出来るだらうと思つて居たにもかゝらず、案に相違して朝廷の御前會議にも列すること叶はず、剩さへ朝廷の内では幕府を討ち倒そうと云ふ人もあると云ふことを聞かれて流石に暗涙に暮れて居つたが、何も御國の爲めと思つてぞつと耐忍して居られた、是れを早くも知つたる會津、桑名の二藩士は、皆慶喜公の處に集まつて参り、悲憤の餘りに討幕論者の重立つたる岩倉卿及び薩摩の大久保利通、西郷隆盛の人々を暗殺して仕舞をうと逸り立つたが、慶喜公は靜かに是れを説諭し、岩倉卿等一派の人々と衝突させない様々、心を碎いて居られた、此時尾張、越前の二侯は、岩倉卿其他の人々のする處は、殊更らに慶喜公を怒らせ、引いて會津、桑名其他徳川方に屬する大名を憤らせ、天

下の大亂に成ると云ふ遣りかたで、如何にも穩かでないと思つたから、何れも此處では一つ慶喜公を説いて穩かに收めれば成らぬと、急ぎ當時二條城で滞在して居られた慶喜公のお目通りに出で、將軍の職を退き、日本の土地を朝廷へ悉く納める様に勧め、其上、尾西、萬一君に於いて其惡人を亡ぼさん云ふ思召しかあらるゝなれば、取りも直さず是れ徳川家を亡ぼし、又天下の人民を苦しめるのでございませぬ、が併し事茲にいたらば何共仕方もなく、私共は只安閑として徳川家の亡ぶのを見て居ると云ふ譯には参りませぬ故、其惡人を亡ぼす爲めに、軍を催して必らずお力を添へませう、決して卑怯な舉動はいたしません、何卒御賢慮の程を願ひ奉る」と真心を盡して申し上げたが、只何事も大君の爲めに、又御國の爲めに祈つて居られた慶喜公は、無念の涙を飲んで將「イヤ其方共の志しは厚く受け

るが、今は只國內で戦争杯を起す時ではない、上は一天萬乗の帝の爲を安んじ奉り、下は國民の爲め、決して左様な無謀なことはしない」と固く誓はれた。處が徳川家の旗本、又は會津桑名等の兵は、却つて尾張、越前侯の心を疑ひ、二侯は薩摩、長州藩と心を合せて徳川家を亡ぼす者であるを見なし、隙を見て暗殺でも仕様と云ふ氣色が見へたので、將軍は大いに打ち驚ろき、様々に言葉を盡して是れを制止し止め様としたが、何しろ主家を思ふ一筋に、何うかすると薩摩、長州、藝州の兵と衝突を起そうと云ふ勢ひが見へるので、何うかして是れを妨ぎ度いと云ふ思召しから、或日將軍慶喜公は越前侯を二條の城へお招きになつた、此時越前侯は心の中に「越ハ、ア君には愈々兵を擧げらるゝので、其の打ち合せの爲めに吾れを呼ばれたのであらう、斯うなる上は今は如何とすべからず、ヨシ……。」と

固く決心をなし、逸かに日光寺照宮と越前家祖先の御廟を拜し、供揃へを命じ、慶喜公の御前へ出るに、慶喜公は非常に打ち沈んだお顔色で、將共の方共の兵士は皆朝廷の御家來の舉動を面白からず思ひ、兵を擧げて戦争をせよと勤めるが、予は何うしても朝敵の汚名を蒙むつて、引いて先祖のお名前をまで汚す事は出来ないから、朝廷に仰せさらば如何に嚴しき事なりとも必ず予は我慢をする考へであるも、併し家臣共の怒りは却に慰める事が難しい、何日何時案外の騒動を起すかも知れないが、何うしたら宜からうかしと言ひ終つてハラ／＼と熱き涙を溢され、シツと差し俯向かれた、流石の越前侯も其のお心を察して涙と共に越ハツ、御心の裡恐れながら御推察申し上げます、今は何とも致し方がございませぬ故、何うか一先づ大阪へお下りに成る方が宜敷からうと存じます、然ういたしますれば、當

川方の兵も必らずお供をして、自から薩長諸藩の兵とも衝突をしなくなりませう尙ほ將軍家が下阪の申し譯けば、及ばすながら私共が必らず朝廷へ申し開きをいたしますと申しあげたから、慶喜公も成る程と思し召し、其夜の内に御仕度を遊ばされ、僅かに會津松平容保侯、其他の人々十三四人のお供を従はせられ、馬に召されて二條城の裏門から秘かに大阪へ下られた、二條の城に在つた徳川方の兵も後を追つて皆大阪へ下つたから、二條城は宛然らの空屋同然、眞に憐れの極であつた云ふ、其内慶喜公は大阪の城に入り、續いて將軍職を辭したが、只徳川の領地ばかりを奉還する云ふは穩かならず云ふ思召しから、未だ領地を返上する處までは進んでいない、斯くして暫らくの間は城に穩かに済んで居たが、濟まないのは當時江戸に在つた徳川家の旗本、及び其他の家臣、此の噂を聞いて大い

に怒り、斯くまで恭順の意を表して居らるゝ徳川慶喜公を、如何に薩藩
 なりとは言へ朝廷の御威光を借りて幕府を討つ心杯は、實に言語同断の
 ことである云ふので、憤怒の情抑ゆる能はず、遂に江戸薩摩上屋敷にあつ
 たる薩州武士と衝突し、引いて是れが伏見、鳥羽の戦争となり、徳川慶喜公
 は大阪を立つて秘かに軍艦に到し、海上を江戸に逃げ歸り、江戸城内の大騒
 ぎと成つたのであります、併し元々慶喜公は決して朝廷に對し刃向ふ考へ
 でなかつたものですから、徳川の家臣にして有名なる勝海舟(安房)山岡
 鐵舟(鐵太郎)等の誠忠に依つて、只恭順を旨とし、間もなく一兵をも交
 へずして江戸城明渡し、の始末になつたので、此の時には勝安房は徳川方と
 して、又西郷隆盛は朝廷方として、此の英傑二人の爲めに辛くも江戸町
 中の焦土になるのを免がれたのです。

○東北諸藩征討の發端

斯くして江戸城を官軍に明渡し、後、世の中は是れで先づ一段落がつい
 た様なものゝ、何しろ天下の大事で、兎に角三百年來の改革ですから、却々
 思ふ様に靜かにはならない、遂には旗本八萬騎と言はれた其内一部の人々は
 不平で堪らない、其上に奥羽地方の大名杯にも不満な心を抱く者があつて
 潮の如く打ち寄する官軍に抵抗すると云ふ事に成つた、然うして奥羽地方
 での大將株となつたのは云ふまでもなく會津の藩で、白虎隊の壯烈悲絶
 なる一幕は、是れより起つたのであります、扱て此方會津侯松平容保は
 徳川慶喜公が大阪より江戸に歸られたのと同時に自分も會津に歸り、暫ら
 くは天下の雲行きを見て居たが、其當時會津城内の評議は區々で、會津藩

の家老西郷頼母と云ふ人の如きは、徳川慶喜公が只一圖に官軍に對して恭順の意を表されて居る上は、兎に角藩侯松平容保様にも、同じく恭順を第一とせられるのであると云ふ考へから、書面を官軍に送つて其の由を傳へるやら、會津藩士の廣澤安任と云ふ人杯は、自から官軍の參謀たる西郷隆盛に會つて、何うしても穩便に事を運ばうとして、眞心を盡して奔走したけれども、何を言つても交通の不便な時ではあり、殊に種々な小さい事の行き違ひやらで、折角二人の骨折りも其の甲斐なく、遂には日頃薩摩、長州、其他の藩と仲の宜くない會津藩中は、惜しむべし皆揃つて城を枕に討死を仕様と云ふ事に決定してしまつた。此の西郷頼母と云ふ人に就いては茲に一場の悲劇があるから、一寸此の間に狭んで述べて置きませう、抑も此西郷頼母と云ふ人は、固く會津の藩主の祖先たる、保科正之公の別家格で

會津藩中第一の家柄であつた、其れ故一寸も客分と云ふ譯で、祿高も小さい大名位ひ頂戴し、會津士民の尊敬を受けて居た上、此の頼母は文武兩道に達し、天下の事情にも通じて居りましたので、明治元年の冬、會津藩主松平容保が京都の守護職を辭職せられた時にも、容保侯に勤めて一時も早く朝廷の仰せに従ひ、恭順の爲めに直ちに會津へ歸られる様と申し上げたが、折角の言葉も遂に用ひられず、不幸にも伏見、鳥羽の戦争となり會津勢は官軍の爲めに討ち破られて、這々の体で本國に引揚げる事となつた時にも、西郷頼母は一書を征討軍に奉つて、主君容保侯の爲めに其罪を許される様と歎願をしたので、是れに依つて暫くは朝廷の方よりもお咎めがなかつた位ひ、然るに其後會津藩が奥羽地方の大名と相談をして、花々しく征討軍を迎へ、最後の決戦をしようとするので、愈々其の準備を整へ、

征討軍は打ち續いて錦の御旗を押し立て、會津の國境に寄せた時に、此
四郷頼母は藩主松平容保侯の命に依り、奥州白河口に出陣して、大い
に征討軍と合戦をなし、一日討ち退ぞけて置いて只一人會津城に立ち歸り
容保侯のお目通りへ出て頼「斯く一時官軍を討ち斥ぞけましたのは、決し
て私しの功ではありません、皆吾君の御威武の然らしむる處であります、
併し戦争に敗北を取つて降参するのは耻辱ではありまするが、一旦勝ちを得
て降参をするのは決して耻辱ではございませぬ故、今日の場合幸ひに吾が
軍の勝ちを得たるを奸機として、少しも早く官軍に降参を遊ばしたるならば
是れまで恭順の誠もあらはれ、又御面目も充分立ちませうと存じます、何
卒御賢慮を願ひ奉つる」と真心をつくして言上したが、何しろ當時戦争をす
るさ云ふ人が多く、到底も其の説を容れることが出来ない様子であつたから

容保侯も詮方なく、故意と聲を勵まして容「イヤ其方如何に申し陳づるさ
も、最早斯く成る上は是非に及ばず、官軍を引受けて潔く徳川家の爲めに
盡す覚悟である、降参杯さば思ひも寄らず、其方如き者あれば吾が精忠
の家臣共に勇氣を挫かしむる様なものである、目通り叶はぬ下れッ」と一時
頼母の登城を差し止めた、是れに依つて頼母も今は仕方なく、憎々として吾
か家に引取り、自分の邸に謹慎して只管ら一藩の行末を案じ、何うがして其
の善後策を講ぜんと思つて居る内、同年八月二十二日、征討軍は先づ石
蓮口の要害を破つて以來、宛然ら破竹の如き勢ひを以つて會津城下近く鯨
波の聲を擧げてドツと斗りに攻め寄せた、大砲の音は遠雷の如く、豆煎る如
き小銃の響きは耳許近く聞へ出したから、屋敷に引籠つて居つたる西郷頼
母は、忠君愛國の念今は身の不興を蒙りたるを省りみるの暇なく、一刻も

早く登城をして殿の御目通りをなし、其の誠心をあらはして主家を救はんぞ
 家族を呼んで最後の暇乞ひをいたします、此時頼母の母律子は年が丁度五十
 才、誠に生憎く老病にて久しく病床に臥して居りましたから、先づ第一に頼
 母は母の枕邊に参り、是れ迄での事情をスツカリ話したる後頼「扱て母上
 私しくは斯く御不興を殿より蒙つた身の上ではありまするが、只今の成り行き
 では主家の行末も覺束なく、到底安閑さして見て居るさ云ふ譯には参りま
 せん、依つて私しは只今より登城をなし、兎も角も御殿の御前にお目通りを
 願ひ、叶はぬながらも只管恭順遊ばす様お諫め申し、萬一殿に於てお聞
 入れのなき其時は、城を枕に討死の覺悟でございまする故、何卒私しにお
 暇を下し置かれまする様」と涙ながらに言ひ出した、スルも母律子は瘦せ
 衰へたる身体を、漸くに床の中に起き上り律「ア、頼母、能く申して呉れま

した、御殿様が先達でお前の言葉を容れ、只管ら官軍に恭順をなされたな
 らば、今日の憂目を見らるゝ事もなかつたらうに、只血氣に逸る人々に妨た
 げられ、斯く譜代相恩の主家を危地におさし入れたのは、返すくも残念に
 思ひます、併し其れも今更らになつては何さも致し方もない、誠に今日お前
 が登城をして、再び御殿に對し恭順の説を申し上げる時には、世の人々は
 お前の心を知らず、只一筋にアレ見よ西郷一家の者は、自分の命が惜しさに
 降参を君に勧めた杯さ口汚なく言はれる時には、却つて西郷家の武名を汚す
 事になる故、お前は一時も早く登城して、吾君に恭順をお勧め申すが宜い
 併しお前の誠心を世に示す爲めに、妾等は此處に潔く自害をし、敵の手に
 掛る耻を免れる事にするから、決して後に未練を残さぬ様」と決然として云
 ひ聞かした、此時側に控へたる頼母の妻千恵子、此の人は會津藩中でも有

名なる美人で、其上學問 技藝 共却々に秀でたる女だつた。傍らより千只、今母様の仰せの如く、妾し共の身の上は聊かも御案じなく、吾君の爲めに一時も早く御登城を成さいます様、妾し共は自害をして決してお名前を汚す様なことはいたしませぬ。流石は會津藩中に其人ありと知られたる、西郷頼母の妻として男も及ばぬ氣丈の覺悟に、頼母は斷腸の思ひをなしながら、尙呉れなく萬事の事を云ひ残し、下には豫て用意の装束を着け、暗涙を飲んで吾が邸を立ち出でたが、窓には病みたる母律子、妻千恵子、其他最愛の吾か子が、目に一杯の涙を湛へて、ツツと此方を見送る。いじらしさに、ハツと今更らなから生別死別の悲しみを感し、進み兼ねたる足の運び折しもド、……ドーンと響く一發の大砲の音に、斯くては果てじと氣を取り直し、頼「ソレ太助、急げッ……」と仲間太助を供に連れ、足を早めてドンド

とく會津城中差して駆け付けた。

○會津家老西郷家の悲劇

此方西郷の邸に在つては、頼母の姿の見へずなるまで見送り、妻の千恵子は早や涙をかくしく、雄々しくも女中に申し付けて、見苦しき品々を取り片附けさせている。チャン／＼、ポーンポーン／＼と籠城の相圖として打つ半鐘、寺々の鐘の音凄まじく、ウワ／＼と老若男女の泣き叫ぶ聲は、折りしも打ち出す征討軍、又會津方よりの砲聲と打ち交り、宛然ら阿鼻叫喚の大地獄も斯くやあらんと思はる、斗りの凄まじさ、聽て残らず家内を片附けたる後、奉公人の下女、下男には残らず相當の金子を遣はして暇を出し、當年二才に成る末子を抱き、他の子供を連れて千恵子は、老母

の病間に出て参り千「母さま、モウスツカリ家は片附けましてございます。又雇人共にも残らず暇を遣はしましたから、今は思ひ残すこともありません。何うか御用意を遊ばして下さいませる様。妾しは幼なき子供を手にかけて、直ぐに後よりお供申します。又長男の吉十郎も共に思ひまするが是れは御存じの通り城内にて籠城の中に加はつて居りまする故、いたし方がございませぬ、是れも全く天道様が良人の孤忠を憐れみ給ひ、西郷家の血統を残し給ふ思召してございませう、妾し共も代々武士の家に生れ来て、今日こそ君家の爲めに最後の忠義を盡しませう、何うか御用意を遊ばして下さいませる様。律、オ、千恵子、妾しは斯く年老ひ、餘命も知れたもの故決して厭ひはしませぬか、只可愛そうなのは子供等ばかり、お前から能く云ひ聞かして下さいよ千「ハイ其れは咄ッ先日から度々申し渡して、決して卑怯未練

な舉動はいたしませぬ、コレ皆の者、今聞く通りお祖母様と共に冥途へ行くのである故、先日から申し聞かしたる通り、必らず死耻を晒して敵方の者に笑はれぬ様、流石は西郷家の家内である云ふ事を、世の中に知らせて父上又兄上のお名前を汚さぬ様、頼みますぞ」さ申し渡した時に一同は「一ハイ……」と言つた斗りで誰れ一言も云ふものがなかつた、此の頼母と千恵子夫婦の間には、一人の男の子と三人の女の子があつたので、其長男吉十郎と云ふのは當時十一才の子供、殊に頼母が自分の邸で謹慎を申し付けられたのに拘はらず、主君より若君のお對手を命ぜられて、其當時も同じく城中に詰めていたのだ。是れから千恵子は當時二才になる吾か末子を抱き、水盃の用意をして最後の暇を告げた、家内の者と云ふのは頼母の母律子、其れから頼母の妹眉壽子、其時二十六才、由布子、其時二十三才、納布子、其時十

六才、瀑布子其時十四才、及び夫婦の間に産たる娘、田鶴、八才、常盤、四才等と残らす水盃を取り交し、聽て用意の硯引き寄せ、短冊を取つてサヲ、ツと認めた和歌が、

なよ竹の風にまかする身ながらも、

撓まぬ節のありさこそ聞け、

と辭世の歌を認めた、是れを眺めて妹の眉壽子、眉姉上、妾しも一首書き遣し度うございます」是又短冊を取つて書き記したのが、

死にかへり幾度び世には生ることも、

ますら武雄さなりなんものを、

是れも同じく辭世の歌で、自分の男に生れなかつたのを歎いた歌だ、續いて其妹由布子も同じく短冊を取つて、

武士の道と聞きしを便りにて

思ひ立ちぬる黄泉の旅かな

と認めると、納布子は口を開いて納いざたごらまじ死出の山路」さ口吟さむと、末の妹瀑布子は愛らしき丹花の唇を開いて「瀑」手を取りて共に行きなば迷はじな」を續けた、

手を取りて共に行きなば迷はじな、

いざたごらまじ死出の山路、

と云ふので、姉上又他の妹共と一緒に死ぬるのならば、冥途の道も決して迷ふ事はなからう、一緒に死ぬるのは誠に本望であるさ云ふ健氣なる辭世、千恵子は日頃吾が子の如く可愛かる義妹の健氣なる心に、思はずツと泣きくすれ千「ア、斯くまで健氣なる妹や子供を、時世さば云ひながら空しく死

出の旅に伴なれば成らぬのであらうか、母様何うか賞めてお遣り下さいませ
 し律、オ、千恵千殿、其の歎きは道理ながら、時遅れては一大事、ソレ早く
 妾しは先きへ行つてお前達ちの來るのを待つて居ります」云ふより早く、
 豫て用意の懐劍キラリと抜き放ち、吾れと吾が咽喉目掛けてホッソウツツ律、
 ウムーツ……」と一聲俯伏げ様に早くも息は絶へ果てた千「オ、母様、暫く
 お待ち下さいまする様……、ソレ田鶴、此處へお出で〜」呼ばれて八才に
 成る田鶴子は田「ハイ母様、是れで宜敷うございますさか」豫て教へられた
 と見へて紅葉の如き手を合せ田「南無阿彌陀佛、母様、早くお祖母様の處へ
 ……千「オ、能く出來ました、早くお祖母様に追つ付いて、賞めて頂きませ
 うれ〜と同じく用意の懐劍抜き放ち、左手に雪をあさむく田鶴子の襟を寛ろ
 げて、右手に持つたる懐劍にて、アツ〜リ力に任して差し通せば田「ウムー

ツ」と一聲コン〜と流れ出る血汐は物凄く是れを眺めて當年四才になつた
 常盤は、只怖いと思つたものか常「ワツ……」とばかりに泣き叫ぶを、千恵
 子は心を鬼にして是れを左手に引寄せ千「其方も武士の子ではないか、卑怯
 者ツ……」と云ふより早く、又もや一刀の許に差し殺した、跡に残つたのは
 二才の春を迎へたる嬰兒ばかり、何にも知られば無心のまゝ、今抱き寄せら
 れたる母の顔を眺め、ニコ〜と笑を含んで千恵子の胸に手を差し入れ、乳
 房を探る可憐の有様、流石大義の爲めにさ、心鐵石の如き烈婦千恵子も、
 今は勝を斷つが如き思ひにて、思はずハラ〜ツと熱き涙をこぼしたわ、
 斯くては果てじと氣を取り直し、血汐のしたゝる懐劍右手に持ち、今しも乳
 房に縋らんとする無心の嬰兒の胸元を、一刀アサツと差し貫ぬき、四人の義
 妹を省りみて千「されば、眉壽子も由布子も、納布子も、濡布子も、吳々不覺

を取りぬ様、お先きへ行つて待つて居ります、南無阿陀佛……」と諸共に
 今しも吾子を刺したる懐劍逆手に取り直し、咽喉を美事に差し貫ぬき、カッ
 パと前に伏した儘、隣れ二十七才の烈婦千恵子は、茲に一命を終つたのであ
 ります、續いて花さも見ゆる四人の義妹も、其れく跡を追ふて自害をして
 しまつた、此時東方にある奥の一間には、律子の母で今年八十幾才になる老
 母さ、其の親族なる小森家の老母、及び妻と子供四人、外に同じく親族なる
 町田家の主人と其子の嫁と孫娘二人、又西郷家の分家たる西郷鐵之助と
 云ふ當年六十餘才の老人、皆其れく最後の別れを告げ、律子の母は老ひた
 る腕に筆を取り、有り合したる白地の屏風に肉太く、

秋霜飛兮 金風冷 白雲去兮 月輪高、

と終命の辭を認め、眞先きに懐劍を以つて咽喉を貫いて自害を遂げ、續いて

其他の人々も美事に刎腹或は自害と、皆最期を潔くいたしました、斯く
 して西郷家の一門一族二十一人は、茲に悲惨なる終りを遂げたが、嗚呼明治
 元年八月二十三日、奥州會津城の内外は、實に血の河、屍の山、白虎
 隊、紅顔花の如き少年の團結にして、空しく飯盛山上の露と消へ、廓内
 の烈婦烈女は婦と言はず娘と言はず、嵐の前の櫻花を散つてしまつた其壯
 絶、慘絶なるお話しは、實に維新最終の一大悲劇と言はれば成りません、

○征討軍若松城を攻撃す

其内にも錦旗を押し立てたる征討軍は、ドツと鯨波の聲を擧げて城内に迫
 り、廓内を彼方此方と敵方の片影を探す折柄、一隊の官兵は此處で會津藩の
 家老 四郷頼母の邸と知るや、「ソレ打ち入つて調べろッ」云ふので、邸

内には早くも右の惨事ありとも露知らず、ドヤ／＼と十五六人の官兵、玄關より躍り上り、「コリヤ誰れか居らぬか、西郷頼母は如何いたしたッ：さ口々に怒鳴り立てたが、邸内は只シーンと静まり返つて物音もなく、殊に玄關は明けつ放しに成つて居るから、「ウム扱ては此の内の一隊の兵士を伏せ置き、吾々共官軍を討ち取らん計略なるやも斗られず、ソレ各々お氣を注げられい」互に注意をしいながら、怖わ／＼とソツと玄關口より書院に脱げ、今しも奥の一間を眺むれば、這は抑も如何に老母を始め十餘名の男女入り亂れて自殺を遂げ、血汐は四邊を唐紅に染めなし、慘憺たる有様に流石の官兵も膽を潰し、「ヤアツ自害／＼」と云つた儘、餘りの事に呆然として居る此方では、別れて踏み込んだ一隊の兵士、別室の襖を開いて驚いた、此處には妻千恵子を始め、未だうら若き花も蓋じらう斗りの娘三

四人、及び幼なき子供が皆揃ひの白無塔の着物を血汐に染めて美事に自害をして居る有様、「ヤツ此處にも自害……」と言つたまゝ、十數人の征討軍は思はず涙を溢して言葉もなく、暫らく其の死骸を見詰めて其壯絶悲惨なる有様を呆れて茫然として居る此時、未だ玉の緒の絶へざりしものか、中に十餘才と見える一女の少女は、此の物音にハツと氣を取り直し、左手に傷口を押へ右手に自分の身体を支へて辛くも其れに起き上り、最後の無念に閉したる目を見開き、ホツと吐く息も苦しげに、官兵の顔をツツと見上げながら女、「其方共は敵か……味方か……」と只一言、萬一も是れが敵であるならば、敵はゆまでも何事かを成さん云ふ凄まじき勢ひに、官兵も氣を吞まれながら切めて少しにても氣を慰めんと思つたので兵「オ、拙者共は會津藩の者だ、味方だ、味方だ、確乎せよ」未だ其聲の終らぬ内、件人の少女

は苦しみ内にもニツコと笑を含み、張り詰めし氣も緩んだが、其場にマツタ
 リ俯伏せになり、其儘息は絶へ果てた、其處で征討軍の内一人の兵士は
 最もも憐れの事に思つていろく介抱をしたが、何うしても息を吹き返さ
 ない、仕方なくも介錯して其場を去り、後に涙を流して此の壯烈なる慘
 状を物語つたと云ふ、此の少女こそ彼の末の妹、妹布子であつたと申します、
 此方彼、西郷頼母は其儘急ぎに急いで城内に登つて來るさ、折柄城内の
 大廣間には、御殿松平容保侯を上座に、一門の重臣共打ち寄つて軍
 議をしていたので、頼母は案内も乞はず直ちに君公の御前に出で頼ハッ豫
 て君より御不興を蒙りたる身の私し、今日此處に罷り出でたるは、實に身の
 程を辨へざる義とお咎めもあらんがなれど、御家の大事に臨んで只安閑と
 邸に引籠り居るは如何にも臣としての道に欠ける事と存じ、御案内も乞は

ずして出でたる段は、幾重にもお計しを願ひ奉ります、拙者斯くお咎めも
 省みずして罷り出でたるは餘の義にも是れなく、吾君先きに恭順を表はし
 て、征討軍に降参をせられたならば、決して今日の如き悲惨なる御有様
 には相成るまじく、誠に遺憾の事と存じます、併しながら今日と雖も、吾君
 の思召しの如何に因りては、拙者直ちに官軍の本營に罷り越し、吾君恭
 順の義を申し入れて、拙者命に代へ此の危急を救ふ事にいたしませう、
 最早や斯くなる後は恭順の外手段なく、又天下の正道とあらうと存じま
 す故、願はくば御賢慮をめぐらされて然る可く、偏に願ひ上げ奉ります」
 と顔を犯して諫言を申しあげ、其れに居並んでいる重役共をシロリ睨め廻
 して頼「各々方は天下の大勢をかへりみづ、拙者が恭順の説を排斥し、
 遂に主家を今日斯かる悲境におとし入れたるは、誠に其許等の罪でござるぞ

併し事茲にいたつては、如何に大勢にくらき其許等と雖も、主君に申し譯けは決してござるまい、然るに尙ほ螳螂の斧を學んで官軍に對する杯とば、身の程知らざる大白痴、殊に主君に國賊の汚名を着せ奉り、果ては代々の御厚恩を受けたる御先祖へ對し、如何に申譯を成さる、思召してござるか、さ決死の顔色凄ましく、滿腔の誠意を表はして怒鳴り付けたので、流石列座の面々も、誰れ一人返事をする者もなく、只差し俯伏して言葉もない、然るに征討軍の先鋒隊たる土佐の軍勢は、城中の一室で斯る恭順の軍議ありさも知らず、勝ちに乗じて三萬餘騎、雪崩を打つてウワツツと鯨波の聲と共に攻め寄せ來り、既に大手門に迄進み來つたので、モウ斯うなれば西郷頼母の諫言も其の甲斐なく頼「嗚呼萬事休す……」と一言洩らし、歎息しながら此の上は本城を死守して防ぎ戦かひ、時機を見て日頃の目的たる

恭順の意を表し、官軍に降らんと決心し、一隊の兵を借り受けて自から其れを率ひ、大手門に走せ向つて一時雲霞の如くに押し寄せたる征討軍を惱まし、其後又もや兵を納めて本城に引退せき、固く其處を守つて居りました、何しろ譯の判らない主戦派の人の中には、西郷頼母は二心を抱く、獅子身中の虫であるさ云ひ出した者があつて、密かに暗殺を仕様と云ふ事が聞へたから、松平容保侯は大いに是れを氣遣ひ、西郷頼母、及び一子吉十郎を秘かに羽州米澤に落してしまつた、そこで頼母は據るなく、主君の厚恩を喜びながら、涙を飲んで米澤に落ち、只主君容保侯の御身に事なかれと心中祈念を凝らしながら、暫らく米澤に滞在して居たが、後都合に依つて仙臺に移り、又更らに北海道に渡り、彼の榎本武揚、大鳥圭助杯と云ふ人々と共に函館の五稜廓に立て籠つたが、後五稜廓落城の時頼母は

榎本 大島等の入々と同じく官軍に降服し、其後福島縣靈山神社の宮司となりて天命を終つたこと云ふ、又其子吉太郎は榎本武揚に引取られて勉強し、後年官吏となりて今に今家を東京に残して居ります、嗚呼一族二十餘人を殺し、赤城會津藩の爲めに盡し、然かも其の説が、同藩の人々を合はす、止むを得ず多年住み馴れたる會津城を後に、諸方に流れ行きたる頼母の孤忠を思へば、誠に涙を以つて推しはかるばかりであります、然かも斯る悲惨なる事實は、獨り西郷頼母の一族斗りてなく、此の他にも澤山あつたが何しろ征討軍が會津領内なる瀧澤峠を越へ、潮の如くドツと會津城下に押し寄せた時は、城中城外の騒動は一方ならず、母や子供の泣き叫びながら右往左往に逃げまじう有様は、眞に地獄の様も斯くやあらんと思はるゝばかり、城中には早半鐘を打ち鳴らして一時も早く藩士を城内に入れ様とし、

藩士は老若男女の別なく、吾れ一に城内に逃げ込んだだけども、何を言つても咄嗟の場合ですから、數多き藩士の家族は、到底も悉く城内に入れること云ふ譯には行かない、或ひは其の途中で征討軍の爲めに捕へられて官軍に引かれる者もあれば、中には田舎へ逃げて行く者もあり、家に止まつて敵の爲めに生捕りの耻を受くるよりは、一死以つて國難に殉し様と覺悟し、悲惨の最後を遂げたものも澤山にあつた、

○長岡の英傑河井繼之助

或る藩士の妻は當年三才ばかりの男の子を、七十才に餘る老母を刺し殺して其の家の襖に、

知るや入まもるに絶へて家も身も

焼くやほのほの赤き心を、

と辭世の和歌を残し、自から家に火を放ちて火中に投じ自殺を遂げたものもある、又會津藩の家老にして沼澤出雲と云ふ人の家では、母親道子は先きに當年十五才になる主人出雲に、家臣千餘人を従へさせて其門出をばげまし、同じく會津領内なる八十里越へと云ふ處へ出陣させてより後、女手ばかりで只管ら其の留守をまもつて居りましたが、錦の御旗には何條敵對する事が出来様か、流石の會津勢も屢々所々で敗軍になるのを聞いて、此の上は城内に入つて、主君の姫君達ちの守護をしやうと思つて居る内、官軍は早くも廓内に攻め寄せ、ドーン……ドーン……と云ふ大砲小銃の音と共に、彈丸は宛然ら雨の如くに飛び來り、其の危険は譬へ様がない、處が此の道子の母は八十六才と云ふ高齢で、おまけに老病の爲めに身体の自由が利かないから

道子は非常に是れを心配し、萬一敵の刃に倒るゝ様なことがあつては終世家名の汚れたと云ふので、道子は母と外に自分の娘二人、姉は十才、妹は十六才の二人と共に自殺の覺悟を定め、自分の邸の客間に屏風を一隻立て廻らし、正面に經机を飾り、其上に香を焚いて準備に取り掛つた。スルト其當時、此沼澤の邸に居た家臣や下男、下女は、皆聲を揃へて皆何卒私し共も一緒に供申し度いと願つたが、道子は様々さ是れを言ひ止まらせ澤山の金錢を分ち與へて、道、お前方の其の厚き志しは有難いが、併し皆の者は決して此處で死を急ぐ必要はないから、切めての願ひは、一時も早く此の處を落ち延び、何うかして悴出雲に出合ひ、今日の邸の様子を詳しく話して呉れ、と言つたが、家臣や下女下男の者共は却々承知をしない、皆仰せの越きは此の内誰れなりとも一人にて事が足ります、其の人選は私し共が

籤取りで定めますから、其他の者は何卒今日のお供が願ひ度う存じます道
 イヤ決して相成らぬ、當沼澤家は代々家老の職にあつて、主君の御厚恩を第
 一に受けたる家である、其方等は只當家に召し使はれた者である故、當殿
 様さは左程の縁は無いものである、依つて殉死杯さ云ふ理由はない、皆併
 し私共は始めより、貴女様方の御側は決して去らぬさ云ふ決心をいたして
 居ります、何卒お供の義を……道女と思ひ再三の強談、成らぬと申せば決
 して相成らぬぞ、其れよりは一刻も早く悴出雲に面會し、今日の模様を話
 して呉れ、さ何うしても許されませんか、家臣、下男、下女の連中も今は
 いたし方なく、泣く／＼暇を告げて沼澤の邸を立ち出でんさしたる此時、
 家臣の内川源吾と沼澤辰之進二人は、今しも飛び來つた一潑の流れ弾に
 中り、門前に於いて即死を遂げたさ云ふ、此方家臣共の立ち去る後、妾を

見送つた後で、道子の母貞十は、道子、其他孫娘の二人に最期の別れを
 告げ、有り合したる短冊を取つて、涙ににじむ筆を取りあげ、
 武士のかれて覺悟の 梓弓
 引きてかへらぬ今日さなりぬる、
 さ認めたが、續いて道子は、
 諸共に死なん命も親さ子の、
 たゞ一筋のまことさなりけり、
 さ認める、申にも姉娘のゆや子はゆいお祖母様、母様、妾しも一首殘し
 ませうと云ふので、別に短冊を取り、
 敵の手にかゝらむよりは勇ましく、
 死ぬもわが身の花さこそ知れ、

須「妾も……」と妹の須賀子は更に、

浮世には残す思ひもなかりけり、

かれて覺悟の今日にぞありける、

と各々辭世の和歌を残して後、茲に四人は悲壯なる最後を遂げた、然るに只一人鈴木勝之丞と云ふ沼澤家の家臣の妻さき子は、一同の人々と共に去らずして後に残り、密かに屏風の蔭にかくれて此の女主人等の最後を見届け、家に歸つて一子勝太郎と云ふ三才の子を刺し、自分も返す刀で咽喉を貫いて死んだと云ふ、此の外に現代議士に成つて居られる柴四郎氏の宅にも、其の親族で柴太助、又は井上丘隅、多賀勝之進、野中此右衛門、小原某、高木某、小山田某の家にも、前後して自殺を遂げた者があつて、實に明治の歴史の其悲壯なる一條を残したのであります、お話し跡に戻つて此方江戸の大

總督府では、よく諸道の官軍を部署し、奥羽北越の大軍を押へ、日本半國を平定する大任を帯びたものは、彼の西郷吉之助、隆盛と大村益次郎の二人であつたが、併し西郷は始め討幕論以外、伏見、鳥羽の戦争、關東征伐、江戸城引渡しまでは自分の一人舞臺で定めたが、上野戦争以來、奥羽平定の大業は、大体の處は西郷の心算であつたけれども、其の實際は大村益次郎のなす處が多かつたのです、竟り政治の方は西郷の長所て、軍事は大村の長所だつたから、戦争杯と云ふと大抵は大村の手で行はれた、其れ故大村は奥羽平定の策略を定めるに當つて、其用意の周到なること、又智略拔群なることは、上野の戦争を経営した時の様ではない、何しろ奥羽の戦亂はその區域が非常に廣かつた、東は東海道、海岸から、西は北陸、諸道まで、戦争の區域が百何十里と云ふ、又其間の各藩では心中が少しも判らな

六〇

い、昨日の味方は今日の敵で、敵が味方が、官軍が賊軍が薩張り判らない、併し其れも今日公平なる眼を以つて見れば、一方は官軍で一方は賊軍と云ふ區別はつくが、その當時奥羽地方の人心は、未だ帝業の何たることを知らない、又官軍の運動についても、少々は非難すべき處も確かにあつたらしい、上に立つ人々には決して其んなことはないが、下々の者には何さなく蛤門の戦ひの復讐と云ふ様な心持ちで、其れを言葉にも舉動にも折々表はすことがある、其れ故奥羽地方の人の目からは、官軍が萬事の仕業は、取りも直さず薩摩、長州、其他西國諸大名の仕業であること云ふ様に信じていたから、竟り日本の東西が覇權を争うので、所謂勝てば官軍、敗ければ賊軍と云ふ考へを持つて居つたのだ、然うして東軍の中堅となつて居たのは、云ふまでもなく會津藩で、續いて仙臺、米澤、庄内、南部、二本松等二十

六二

餘大名が聯合して、其兵數は殆ど七八萬と云ふ大兵であつた、其上に幕府の脱走兵で大鳥圭介、沼間新一の兩大將分、或は上野の敗兵、杯が馳せ集まり、前の敗軍の耻辱を雪ぐは此の時であること云ふので、續りに官軍を討ち惱ます、官軍にして一度び其勢ひを失なへば大舉して江戸城へ迫り、折角成りかけた維新の大業を根本的に轉覆しやうと云ふ勢ひだから、そこで大村は深く此の様子を察し、何でも敵方の中堅を討つのが肝要で、敵の中堅は會津藩であるから會津を攻め落すのが目下の急務、此會津をさへ落して仕舞へば、奥羽の諸藩は戦はないでも自然に潰へてあらうと云ふ考へから、先づ會津攻落の計略を立てた、然して其軍略は先づ正面の攻撃軍とし、大軍を越後口から進撃せしめる、此の越後口の方に盛んに景氣心つけ、何でも彼でも敵の首腦を此の方面へ集めさせ、其の隙を規つて背後の攻

六二

撃軍を白川口へ進め、急に會津城の空虚を攻めさせ様と云ふ大体の軍命を定めた、其の他には一の別軍を敵の中央に置いて、敵方の聯合を妨げる爲め、秋田、津輕等の諸藩を助けさせ、三方から會津城を取圍んで落城させ様と云ふ手筈だつたが、成る程大村の活眼は驚いたもので、その間には少しの伸び縮みはあつたが、戦争が終つてからの経過を見るに、始めて定めた手筈と少しの相違もなかつた云ふので、其智略に感服しないものはない、扱て又官軍の總勢は十萬人で、正面の攻撃軍は北陸鎮撫總督高倉三位卿、副總督四條大輔是れを總率し、長州の山縣狂介、此の人は現今の山縣有明大將、續いて薩摩の黒田了介、此の人は故黒田清隆、此の二人が參謀で、背面の攻撃軍は薩摩の伊知地正治、土地の板垣退助が大將となり、中堅の別軍は大 山參謀以下の兵でありましたが、今しも背面の攻撃

六三

軍は伊知地正治の指揮に依つて、白河城を死物狂ひに攻め立てる、時は明治元年七月の下旬、此方は正面攻撃の官軍、何でも只一揉みに揉んで會津城へ迫らうと云ふの勢ひ破竹の如く、總督の高倉卿、副總督の四條卿は共に越後高田へ到着した、其れに續いて山縣、黒田の英傑は、薩州、長州、加州、備州、松代、飯山等の兵を率いて、宛然ら猛虎の群羊中を行く如く、戦へば勝ち攻むれば取り、隊伍堂々として勝ちに乘じ、今日しも越後長岡の近傍へまで兵を進めたが、思ひも寄らず此の長岡藩、流石の官軍も喰ひ止められ、北越第一の大激戦となつた、是れは實に豫想外で、何故か云ふと此の長岡と云ふのは誠に小さい藩で、その兵士の數も素よりお話しにならぬ、其れ故官軍の方でも一飲みと思つて居たから、殆ど數の中へ入れてなかつた位ひだつたが、來て見るに意外……、僅かに何千と云ふ少ない

六四
 へい、何萬と云ふ官兵。しかも勝ちに乗じて破竹の如き官兵を此處で暫らく
 でも喰ひ止めた、官軍では寧ろ不思議に思つて、能く調べて見ると、全
 く此の長岡城中には、當時北越第一の俊傑と呼ばれたる河井繼之助と
 いふ者があつたが爲めで、此の河井は和漢の學問に通じ、學識は古今に稀な
 位ひの人物、若年の時より江戸に出て、天下の名士俊傑に交り結び、
 後長崎へ行き外國人に就いて砲術を修め、其れから長岡藩へ歸つて
 重役に擧げられ、藩主を助けて政治を執り、力を盡したことはすくなくない
 其内でも目に立つた事は遊廓を全廢する事云ふことであつた、現今では遊廓
 全廢論だとか、或は廢娼論杯と云つて八釜敷いことを折々聞くが、其當
 時に斯んな處へ注目した者は一人も無かつた、又一つは藩士の祿高を削つて
 長岡藩の武備を修めた、一寸聞くさ何でもない様だが、それが却々困難

なことで、藩士の祿高杯を減せば、多くの人に怨みを受ける、併し大き
 い仕事をするには、小さい事を省る筈がない、そこで河井繼之助は多く
 の怨みを身一つに引受け、藩士の祿高を削つて武備を治め、只管長岡藩
 の爲めに力を盡した。

○紅顔の少年烈士白虎隊

これが爲め始めは河井繼之助を悪く云つた者も、後は皆歸服して、遊廓を
 廢して仕舞をうさ云ふことに力を盡した、併し始めの間は藩士の人々も皆、
 其れは不可ない、往昔から種々の學者連中が考へて、何うしても遊廓を置
 くさ云ふ点から、日本全國大抵な處には皆設けてある、萬一是れを全廢
 すると、青年の人々の間に却つて不倫なことが行なはれて不可ないから、

何うしても遊廓は置かれね成らぬ」さ。斯う主張する者が多かつたので、河井の云ふことが一時行なはれない、スルト河井も又再び言ひ出さなかつた。繼「ア、左様か、成る程。う云へば然うか然も知れない」さ云つたきりで黙止り込んで仕舞つた、スルト其れから暫らくして河井繼之助は、頼りに酒を飲んで遊廓へ入り込み、流連杯をして長岡で一二さ云はれる女郎屋池田屋の雛鶴さ云ふ女の許へばかり遊びに行つて居たから、河井の朋友杯は、朋「オヤ、何だ、前には河井の奴ツめ、遊廓を廢すとか何さか難かしい事を云つて置きながら、然う云ふ御本尊が先きへ立つて浮れている、那リア河井が遊廓の味を知らなかつたからだらう、併し餘りの事だから一つ意見をして遣らう」杯さ朋友連中は頼りに手を代へ品を代へて意見を試みるさ、只繼「ウム宜しく判つた、御注告の段有難い」さ云つたきりで、相變らず

澄し込んで遊び廻つてゐる、尤も此の越後は東北地方で女郎の本場さ云ふ位ひ、越後は日本の美人衆を引いた土地ださ云ふが、成る程越後の女は大抵色が白くて奇麗だ、現今の東京邊りでも、越後の女は澤山女郎に來てゐる、又方今では其んなこともあるまいが、従前は女の子が下等社會へ生れるさ、屹度娼妓や藝妓に賣るものゝ様に思つていた、又藝娼妓稼ぎをして自分の家を助けるのを、大變自慢の様に心得て居つたから、一軒の家に赤ん坊が生れるさオギアーツ「ナニ女だ、占めた、其奴ツは有難い、金箱が生れた」杯さ大變に喜ぶ、其れに引換へ男の子が生れるさ「ナニ男だ、オイヤオヤ、斯んなものは本統に金にならないや、エイツ……」赤ん坊の襟首を掴んでヒヨイさ向ふへ放り出す、それだから越後の男は腰の骨が弱くなつて、皆んな越後の角兵衛獅子になつて仕舞ふ、是リア昔しの落語家が

六八
 拵らへた落し話して、決してあてにはなるまいが、兎に角女の子は非常に喜ぶ處だ、是れ故に長岡の遊廓杯は、實に繁昌なものですから、河井が是れを全廢するさ云つたつて、却々一朝一夕の事には行はれない、處が河井は別に考へる處があるから、澄し込んで遊廓へ殆ど毎日の如くに入りひたり、ウカ／＼遊んでいる様に見せ掛けた内にも、審らかに遊廓の内情に通じ遊廓へ遊びに来る人の種類を見ていたが、彼の藩士等の云ふ如く青年の人数が多く遊びに来るかと思ふさ、意外にも此の遊蕩男は、青年より却つて妻子を持つて居る人間が澤山にある、其處で其の統計をスツ方り調査して、河井は屈強の證據を得たりと打ち喜び、其處で改めて主君に御目通りを願ひ、繼「私し心ならずも放蕩に身を持ちくすし、花柳の巷の内情を探りましたる處、多くの人の云ふ事さは大分に相違をして居ります、青年の者が何うだ

六九
 さか斯うださか云ふのは、つまり一種の口實で、其の口實を設けて自分共が遊びに行き度いのに違ひありません、其の證據には此の通りで、遊廓へ遊びに行く者は、青年の者より却つて妻子のある者が多くございます、其れ故遊廓杯は廢してしまつても、決して差支へはありませぬ」と證據を擧げて建言したから、途頭是れが爲めに長岡の遊廓は廢止になり、其れで別段差支へはなかつたさ云ふ、是れ杯は河井の奇才で、常人の思ひ掛けない事でありませり、斯様な智略に長けたる河井繼之助が控へているので、長岡城は一小藩さは云へ其勢ひ猛烈で、流石精銳をきわめたる征討軍も、容易に落城せしむる事が出来ない、激戦に激戦を重ねて辛くも長岡城を攻め取つたかと思ふさ、其翌日には又しても河井等の爲めに其城を奪ひ返さるゝと云ふ始末で、此長岡城恢復さ、會津籠城さは、實に奥羽戦争中の大激戦

であつた、併し官軍方は何うしても此長岡城を陥落しなければ、會津に攻め寄せることが出来ない、又會津の方でも此處を巧く妨がなければ、會津城は見る／＼官軍の總攻撃になること云ふことを知つていたので、兩軍共死力を盡して戦つて居ましたが、其内官軍の參謀山縣狂介の計略で、河井繼之助の大負傷さによつて、遂には長岡の落城となり、河井は部下の爲めに無理に駕籠に乗せられて、九死一生と云ふ大切な身体を、ゆられ／＼して會津に落ち行く其途次、四十二才を最後として遂に不歸の客となつてしまつた、官軍は是れて萬歳を稱へたが、一方別軍、並びに白川口の官軍は何うか云ふと、皆其功をあらはし、白川口の官軍は七月二十七日に三春城を降順させ、進んで二本松城を攻め落し、駒ヶ峰に在つたる會津勢を討ち退けた、其二本松を陥落したる日は、長岡城が再び陥つた日と同

日であつた、そこで伊知地、板垣の兩參謀は部下の隊長を集めて將來の軍議を凝らした、其隊長の中には薩摩の野津鎮雄、同じく道貫の兄弟、逸見十郎太、土佐の安岡貢之助、小笠原謙吉、長門の有地品之丞、原田良八杯と云ふ一騎當千の勇士豪傑雲の如く、中には海陸二道より軍勢を進めて一舉に仙臺を陥れるが宜いと唱へる人もあつたが、此時板垣の説として、何しろ今度の戦争は會津が根本であるから、會津をさへ陥れたならば仙臺其他の枝葉は自から枯れること云ふ申し分で、且つ今は秋であるが、職争がもし長引いて冬に亘れば、雪は降り積つて四方の山々を埋め、軍兵の道や糧食の運搬の道が絶へるから、來年の春でなければ到底も討ち亡ぼすことは出来ない、依つて目下の軍略としては仙臺、其他の諸藩には手を下さず、急に會津を攻めるが宜からうと云ふ説であつたが、遂に此板垣の軍略

に全軍一致して、薩摩、長州、土佐、美濃、大垣、大村、杯の諸藩の兵を以つて、攻撃軍を組み立てた、扱て此奥州街道から會津へ行く途には、白川より長沼、勢至堂、三代を経て達する白川街道と、本宮より熱海、中山を経て猪苗代の北岸に出で、戸の口を過ぎて達する所謂仙臺街道と、他には須賀川より三代に出で、達するものを、本宮より猪苗代湖の南に出で、達する道と、未だ其他に道路の最も險はしい二本松より石蓮、暮成峠を越へ、猪苗代を経て若松に入る間道があります、處が會津勢では豫て官軍が國境に迫らんとする様子を探つて、白川街道其他には妨害を嚴重にしていたが、石蓮、口の間道には有名なる暮成峠の險岨があるので、其妨戦の備へが手薄であつたから、官軍の伊知地正治は早くも是れを探り知り、一撃に進撃の策を定めたので、會津軍の苦戦も其の甲斐なく、もろくも敗軍

して石蓮山下の暮成峠の陣營、は一日の内に官軍に占領されてしまつた續いて官軍は猪苗代城を攻め取り、中山口に進んで来た官軍と合し、川村與十郎に薩摩の別隊を率ひさせて進軍をさせた處が猪苗代湖の流れる日橋川に架けてある石橋を、戸の口十六橋と云ふので、橋の下の流れは宛然ら矢の如く、渦巻く水は石に觸れて凄まじきばかりの有様だから、此の橋がなければ到底も渡ることが出来ない、従つてスラ戦争と云つた時には此の橋を落して敵を妨ぎさへすれば、一步も渡ることが出来ないで、猪苗代湖岸で第一の要害であつた、是れ故會津軍及び猪苗代の敗兵は、急き戸の口まで退却して、今や將に此の橋を落して、官軍を防がんご用意を整へ、今しも此の橋を崩し始めたる折しも、官軍の大將川村與十郎は與「スラ」大事、ソレ進めツ〜ツ」ご自ら眞先きに立つて宙飛ぶ如く駆け付け來り、ウラ〜ツ

ツ。ド………何萬の軍兵長蛇の如く、橋上に差し掛つたので、流石の會津勢も其素早い働らきにはアツき斗りに打ち驚るき。其橋を切り落すことも出来なければ、又支へることも出来ない、這々の体で戸の口原まで退却した。其内官軍は材木を運んで暫らくの間に破壊の個所を繕らひ、軍容堂々、橋板を踏み鳴らして全軍無事に此處を向ふへ渡つてしまつた、此時若松の本城では、思ひも寄らぬ此間道から征討軍が攻め寄せたので、城中城外はハツき震へ上り、鼎の沸く如き大騒ぎを始めたが、血氣壯んの若武士の面々は、皆中出口、白川口、日光口、越後口の方面に出て仕舞つて、本城を守つて居るものは老人だの、少年だの、或は婦人扱ばかりであるから一時途方に暮れてしまつたものゝ、此の儘で亡ぶることは出来ない云ふので、僅かに残つて居る藩士を集め、遊撃隊と敢死隊、及び白虎隊を選ん

で急に戸の口に出だし、是れを以つて雲霞の如き官軍を防がした、

○白虎隊烈士の門出

抑も此白虎隊と云ふのは、何處から来た名前であるか云ふと、前述の如く此の會津は非常に武藝の盛んな處で、藩祖保科正之侯の始められた學校が、此の當時は日新館と言つて、藩内の少年青年は皆此處で文武の途を修めて居つた、其處で藩内では平常から藩士を四組に分ち、朱雀、玄武、青龍、白虎と、此の四隊が出来て居りました、此の内では玄武と云ふのは老人半りの隊で、朱雀、青龍は血氣の武士を以つて編成されていた、又白虎隊は會津士族の子弟で、十五才より十七才までの少年を撰抜して編制したもので、日頃日新館では萬一の場合に備へる爲めに、幕府の兵學者大川

七六
 正太郎、沼間新次（後に守一）杯云ふ人を招いて佛蘭西式の訓練をやつて居りましたが、其技術の次第に熟達するに従がつて、白虎隊の少年は何うかして戦争に出して貰ひたいと云ふので、ヤイ／＼先輩の人に迫つて居つたけれども、何うも思ふ様に行かないと云ふ處から、遂には安達・篠田と云ふ白虎隊中の少年が隊の總代となつて、一書を家老萱野権兵衛に上り、何うか敵の最も強い方面へ、吾々を遣つて下さいと願ひ出した位ひだつた、スルと家老の萱野権兵衛は、流石此の少年烈士の志しを健なりとして、會津松平侯の世嗣喜徳侯が、會津の國境を巡回した時に、此の白虎隊を親兵として、専ら喜徳侯のお手許へ付屬させる事に斗らつた、然るに愈々八月に入つて、會津軍は石蓮口で敗軍をしたと云ふ報が達したから、流石の家老其他重役の面々も、此の望み多き少年隊を敵方に向はしむるは、

何共、不憫なこゝであるとは思つたもの、何しろ焦眉に迫れる急の場合ですから、據らなく隊長たる日向内記に出陣の事を命ずるさ、内記は躍り上つて打ち喜び、直ちに隊中の少年を呼び集めた、スルト少年隊の連中はいよく出陣を聞いて健氣にも飛び立つばかりに打ち喜び、父母に暇乞ひをして家を出る時には、父母も常に壯烈勇敢なる會津武士の精神として、何れも其愛する子の初陣を喜び、卑怯未練の舉動なき様に、吳々も云ひ聞かせた、中にも池上新太郎と云ふ少年は、日向内記より白虎隊全部に召集の命を下し、此の池上の家へも使ひを遣はしますと、新太郎は自身支關口に在つて此の使ひの趣きを聞き、喜び勇んで父與兵衛の前に出て参り、新ハツ父上に申しあげます、只今隊長日向殿より、白虎隊全軍召集の命令が下りました、何でも聞く處に依れば、官軍が今しも戸の口を渡

つて本城へ差し迫る様子故、其方へ打ち向ふしむる様子らしくございませぬ、
 依つて私しは只今より出陣いたします、決して御父上、又は會津武士の名
 前を汚す様のことはいたしませんから、何うかお暇を願ひます與「ウム然う
 か、健氣なる其方の一言、行けくッ、跡は決して心配に及ばぬ、此の父も
 總て冥途に於て其方に面會をするであらうが、萬一其方がイザ云ふ場合
 に成つて卑怯の事をいたさば、決して再び面會は致さぬぞ、何うか潔く君
 國の爲めに盡して呉れ新、ハツ畏こまりました、其れでは御免ツ……」と自
 分の部屋へ引取らうとするさ、父與兵衛は是れを呼び止め與「ア、新太郎、
 其方は當年十六才であつたナ新、ハツ左様でございます與、十六才云へば
 總て元服もいたされば成らぬ身であるに、母に似たものか性來其方は身
 体が小さい、後姿杯は十二三才さしか思へぬ、左様のことではイザ戰場と

相成つても、敵方の者は必らず汝を小兒と侮つて、充分對手にも相成らぬで
 あらう、其れこそ却つて其方の幸ひ、隙きを覗つて敵に近寄り、力に任し
 て是れを以つて敵を突け、サア是れを與へる」と床の間に架けてあつたるは
 池上家に代々傳はる寶刀にて、關兼光二尺三寸と云ふ大業物、新太郎
 は涙を流して打ち喜び新「ハツ辱なく存じます、此の刀こそ御先祖が、
 御魂を込められし業物故、其御威徳に依つて必らず目覺しき働らきを成し
 池上の家名を耻しめません、其れでは父上御免ツ」さ僅か十三四才さしか見
 へない池上新太郎は、此の關兼光の大刀を帶し、褌鉢巻甲斐くしく
 身仕度充分にいたして草鞋を穿きしめ、吾家を跡に勇ましく、本城差して乗
 り出した、又永瀬雄次と云ふ少年は、豫てより今日あるを知つたものか、或
 日の、こゝ母系子の前に出て参り雄「ハツ母上、私しは少々お願ひがござい

八〇

ます、何卒御聞届け下さる様、只管願ひ上げ奉ります糸、オ、雄次、改たまつて願ひさは何んの事であるか雄「へい、別義ではございませんが、何卒私しに草色の着物、又草色の帯、袴を一揃ひ新調して頂き度う存じます糸「ホ、ウ、草色の揃ひの着物さは可笑いが、併し其れは何んの爲めに拵らへて呉れさ云ふので……雄「へい、母上も御承知の通り斯く天下の亂れとなり、當會津杯は何時官軍と戦争をせれば成らぬかも判りません、其れに就いて當城は四方を山野に圍まれて居りまするが、其山野に於て戦ふは、成る可く敵の目に懸らない様にして、味方の爲めに奇功を立て様と云ふ考へから、草色の着物は敵の目に觸れ難く、其れ故お願ひ申すのでござりまする」少年ながらも流石會津武士の胤だけあつて、其云ふ處、誠に勇ましく、誠に奇抜な考へであつたから、母、糸子は早速草色の前への衣服を新調して

八二

與へた、其内に時來つて今日こそ白虎隊が愈々出陣と云ふので、召集の令が來たから、此少烈士は飛び立つ斗りに打ち喜び、早速母や姉に暇乞ひをして、水盃を取り交し、愈々出陣と云ふ間際になつて姉の貢子は、弟の爲めに其門出を祝し、乾栗、大豆、胡桃、松葉を盆に盛り、其れへ持ち出して「眞ア、雄次や、是れは豫て當會津の御藩祖様が、出陣の門出を祝ふ儀式の盛物、何うか戦争に勝つて無事で再び歸つて來る身をまつのである、其の心算で一つ喰べて呉れます様、勇ましく今日の別れを送ります此時雄次は決然として雄「イヤ姉上、私しは今日出陣をいたしますれば決して再び還つて來る考へはござりません、其思召しは有難く頂戴いたしまするが、今日の場合到底も生還を期すことは出来ません、其れでは母上、姉上、さらば御免を蒙ります母「オ、雄次、其れでは今から御出陣か雄「

「ハイ母、ア、お父上の御位牌へはお暇乞ひを済ましましたか、雄「モウ篤くよ
 りお別れを申し上げました、御免ツ……」と雄次は身仕度さへも勇ましく、
 折角姉が志した一個も口に入れず、敵軍に馳せ向つて縦横無盡に駆けめ
 ぐり、骨を原野に横たふる決心で、何うしても生還を期せざる心掛けが見へ
 て居るので、流石の母親、姉も一言なく、雄次を門前まで見送つて、優しき
 双眼に宿る露は、ハラ／＼と袖に落ちた、同志の一人間瀬源七郎と云
 ふ少年は、愈召集の令を受取るに、白木綿の筒袖を下に着し、紺羅紗の
 同じく筒袖を上に着し、紫縮緬にて紐を付したる義経袴を穿ち、豫て
 家に有つたるゲメル銃を肩に、臘色鞘の大小刀を帶し、房々たる髪を束れて
 茶洗盥に結び、装束終つて別れを家内に告げ、今しも門を出でんとする
 時、門口まで見送つて来た兄新之丞は新「コリヤ源七郎、先程より突々も申

○烈士石山虎之助の逸話

し聞かせし通り、決して拔擢の功名をしては相成らぬ、又勝つて誇り顔に進
 むことは出来ない、第三には敵方に捕はれて耻辱を晒らすなよ、第四には萬
 事に就いて間瀬の家名を汚がすな、只其方の務めを固く守れ、云ふべきこ
 とは是ればかり、行け／＼源七郎は莞爾と笑を含んで源「ハイ、私しは
 只だ君父の恩に報ゆべき事を知るばかりでございます、兄上のお言葉は確か
 に承りました、然らば御免ツ……」と云ふより早く、武者草鞋を踏みし
 めながら、足に任して韋駄天走り、砲彈十字に飛び交ふ會津城を差し、早く
 も妻は見へず成つた、

斯くの如くして紅梅花の如き會津白虎隊の少年は、何れ劣らぬ梅櫻、

其門出も所謂十人十色で、桃花は紅ひに梨花は白く、誠に千紫万紅の趣きがあつたが、何しろ未だ十五、六、七と云ふ少年ばかりですから、平生には其特色が充分に表はれて居ない、其中にも石山虎之助と云ふ少年の如きは最も面白き逸話を残してある養父は石山彌右衛門と云つて食祿は百五十石、馬廻り役を勤めて居たが、是れが却々の學者で、家老の西郷頼母と最も親しき間柄であつた、此虎之助が後に白虎隊の一員となつて美名を飯盛山上に残した、處が此虎之助十才の時よりお小姓の役を命ぜられ、御世嗣喜徳侯の御側にあつたが、此當時喜徳侯は御父容保侯に従つて江戸表に在つたものですから、虎之助も其お供をして江戸の上屋敷に止まり、何時も喜徳侯と共にお庭で戯れこなぞをして居る、處が最早や間もなく藩主容保侯は會津へお歸りに成るに就いて、虎之助も共に其お供を仰せ付けら

れる様な噂があつた、處が御世嗣喜徳侯は相變らず江戸表に止まられる次第であるが、其當時此虎之助は十四才、喜徳侯は何うも此の虎之助がお氣に入りて御手許を放したくない、或日庭前へお立出でに成つた時に、虎之助を只一人築山の小亭へ御連れになつた、時しも秋の暮れつ方、木々の梢は霜に飽いて紅ひの色をなし、其の間に松、杉杯は緑りの色を交へて一段の風情、遙かに袖ヶ浦の海を見晴して白帆の点々するさまは、殊に氣も心も暢然とする位ひ喜、ア、何うぢや虎之助、宜い心地ぢやナ虎「左様でございませす喜」近き内にお父君に於ては本國會津へお歸りになり、予は今暫らく當江戸に止まることに相成つたが、其方も父上の供をして、久し振りに其許の邸へ立歸り、母に合ひたいだらうと思ふが、何うだ、其方も會津へ歸るか虎「イヤ私しは何さかして若殿様のお側に居り度く心得ます喜、ウム、然らば

其方、父上と共ニ國へ歸ることを望まんか、虎「ハイ喜、併し父上も其方を愛し、供をいたさせると云はれるが、予は其方を手放したくない、虎「ハッ恐れながら私も同じ思ひにございます、喜、其れでは虎之助、虎「ハッ喜、今は新く天下泰平の如くに相見ゆるも、聞く處に依れば近頃外國の船艦、吾が日本に來航し、何時なんぞき國家の大亂と相成るや斗り難い、其の際に吾れ未だ若年と云ひながら、必らず一天萬乗の帝の爲め、又將軍家の御爲めに目覺しき働らきをして見するぞ、其時其方は予の馬の轡を取るか、虎「道は有難き御錠を承ります、私しさても同じく少年ながら、イザと云ふ其時は、家に傳はる錠を着し、必らず君の御馬前に討死して、天晴れ會津武士の名を擧げます、喜、オ、誠に年は行かれど其勇氣は面白い、其れでは父上に云ふて其方は暫時江戸に残る様いたすぞ、虎「何卒左様に願ひ度う存じます、

喜、併し其方の父も父上に従がつて會津へ歸るのであるから、予より其旨を申し渡す、依つて其方も父に予が云ふたと申せ、早く宅へ參つて告げる、ア「秋の夕景色は何となく心地宜いな」世嗣喜徳侯に於ては紅葉を御覽になつて居る内に、虎之助はお暇を告げて築山を此方に下つて來る其途中、ヒヨイツと下を見るに、其處へ落ちてある一本の手紙、表書は何うやら艶かしき女の手跡、虎「何じや此の手紙は……」と思はず手に取上げ、虎「ハイア向ふに見ゆるはお女中達、ア、綺麗く、實に美しいことである、吉野龍田の花紅葉、一時に是れへ集めしかと思ふばかり、天下泰平の時ば婦人が盛裝をして歩行ものさ相見へる、併し當松平家は往昔より武道を以つて天下に鳴る位ひ故、婦人なぞの噂さはあまりいたさぬものとしてあるに、誰れであらう戀しきお方杯と表書がしてある處を見るに、厭うべき文に相違ながら

う、何者が落したか、イヤ面倒だ。此の儘捨て置かう」と今や其處に投げ捨てんとした時に、バタ／＼ツと其れへ出て来たのは振袖着たる十六七位ひの美しき一人の女中女「ア、モシ虎之助様……虎「ヤッ貴女は何誰でござる女」妾しは青柳と申すものでござります虎「ハ、ア左様か、此の紅葉の節に青柳はチト可笑しござるナ、併し何の御用で青「今貴郎のお拾ひに成りました其文は、實妾しは落しましたので……虎「ア、左様でござるか其れでは其許へお返し申そう青「イエ貴郎様、相済みませんが貴郎が折角お手にお取り遊ばしたるもの故、折入つて一つのお願ひがござります虎「何さいたします青「妾しを憫れと思召し、貴郎様から何うぞ……お届けを願ひます虎「是れは迷惑千萬、手前より届けて呉れと仰せられるか、シテ何人に届けたら宜敷うござるナ青「ア、山本様の若様……虎「山本……、ア、御用

人の山本様の御子息、新太郎殿でござるか青「左様でござります、先刻是れへ新太郎様がお越し遊ばした故、お話しいたそうと存じました處、若殿様と貴郎様がお見への様子に、ツイ慌て、彼方へ参る時に、取り落しましたものでござります、何うぞ新太郎様へ此の手紙をお渡し成されて下さいませ」暫らく考へて居た虎之助は虎「フム左様か、イヤ其れはお届け申さんではないが、不義はお家の御發制と云ふことは、手前少年なりと雖も父より承わつて能く存じて居る、然るに何か此の手紙の表に認めし文字を見るに、戀しきお方とあれば、是れ不義淫奔のことと思ふ、左様なものを取次ぐと云ふは、何うも不都合でござるナ青「御言葉は御道理でござるが、萬一お取次ぎ下さるこそが出来なければ、自害をいたすより外いたし方がござりません虎「イヤ是れは困つたナ、取次ぎをいたさんければ死ぬと云ふ、何うも

飛んだものを拾つたわい……マア、宜敷い、新太郎殿へお渡し申そう青
 エ、其れではお渡し下さいませるか、其れは有難う存じます、けれども萬一貴
 郎が此の事を妾しの父へお告げになれば、必らず妾しは手討ちになるに相違
 ございませぬ、父の手討ちになる位ひなれば、今此處で自害をするか、貴郎の
 爲めに討たれるさもいたします、不憫と思召さは何うぞ御内分に……虎「是
 れは何うも行き届いたる其お言葉、恐れ入つた、イヤ決して御心配には及ば
 ん、確かとお届け申す青「何うかお願ひ申します」虎之助は子供心に仕方
 がなく、右の文を持つてお庭の内を、何處に新太郎が居るかと思つて尋ね歩
 行たが、何うしても判らない、是非に及ばず袂へ入れて、會つたらば渡して
 遣らうと思つて居るさ、其處へハツタリ出遣つたのが、同じ若殿付きの友達
 ちだ友「ヤツ是れは虎之助殿、紅葉狩でござるか、虎「イヤ左様な譯ではござ

九

らん友「何か只今お奥の方で、お身の父上がお尋ねでござつたぞ、虎「左様で
 ございませるか、手前も今宅へ立ち歸る處で……友「ア、其れでは早くお歸ん
 成さい、虎「承知いたしました」さ手紙を袂へ入れたまゝ、虎之助は自分の邸
 へ立ち歸つて来た、

○蛇は寸にして其氣を表す

今しも自分の邸へ立ち歸つて来た石山虎之助は、父の部屋へ参り、虎「只今
 ……彌「オ、虎之助、何處へ行つたか、只今御殿へ行つたら見へん様であつ
 たが……虎「ハイ、私しは今若殿様のお供をして築山の小亭へ参つて居り
 ました、其時若殿様の仰せには、國許へ参るには及ばん、江戸表に予と共に
 居れさのことでございませぬ彌「ハイア又若殿様の吾儘か、貴様杯は會津へ

参つて、國の風を受けた方が宜いのじや虎「其れでも若様が然う被仰いましてたので……彌「宜い、其れでは又御殿様へ願ひを上げるであらう」と云ふて居りますと一人の女中「女」アノ若様、お召換へを遊ばします様虎「オ御苦勞」虎之助は衣類を着換へたが、袂から例の手紙を出すのを忘れて仕舞ひ、其儘虎之助は自分の部屋へ引取つた。處が女中は虎之助の着物を畳まうとして、思はず手に當つた一通の手紙、何の氣もなく其れを父彌右衛門の處へ持つて來た女「アノ旦那様、若様のお召物の袂から、斯様なお手紙が出来ますと云います、何うやら女のお方から來たお手紙の様で彌「然うか、見せろ……ウム、青柳としてある女」オヤ青柳様と被仰るのはアノ田中様のお嬢様ではございませんか彌「ウム然う、田中の娘お君が御殿へ上つて青柳と云つて居るそつだ、何時の間に斯様なことをする様に

なつたか……イヤ是りや悴へ送つた文ではない、山本數馬の悴新太郎へ宛てた書だ女「オヤ、然うでございませんか、何うして其れを若様が……」彌「然うだナ、悴めが何うして斯んな手紙を……」云つて居る處へ出て來た虎之助「虎」ア、コレ房、今日の着物の袂に手紙が這入つては居なかつたか、彌「コリヤ虎之助、何うも怪しからん奴ツだ、已れ子供の僻に田中庄左衛門の娘君の手紙を、山本の悴新太郎へ届けることを受合つたであらう虎」お父上、何うして其の手紙の名前を……彌「中を見る、青柳より新太郎様としてあるわ虎、是れはお父上にも似合ひません、私には子供ではございませが、常にお父上のお言葉に、決して他人の手紙は善悪ともに開封をしてはならぬと云ふことを承わつております彌「ウム虎、私しも中に何が書いてあるかは存じませんが、最前斯様くで、上封を見ると如何はしき文字か認

めてございますゆへ、捨てやうと存じて居りますと、青柳と云ふ婦人が出て参り、私しに拾はれたからは隠さないから、是れを山本新太郎殿へ届けて呉れ、承知がなければ此の場で死ぬと、短刀に手を掛けて既に覚悟の様子でございましたから、手紙を届けるだけならするが、後のことは決して介意ぬつもり、殊に武士たる者が、婦人から文を受けて心を動かす様なことはなからう、取次いだ處で差支へはないと存じて受合て参りました」父の彌右衛門は苦しい顔をして彌、イヤ今の子供は兎角小理屈を云つて困る、マア、斯様な思はしい手紙杯は妄りに取次かんが宜い、萬一間違ひのあつた時は其方も共に人の誹りは免がれぬ、捨て置け〜」と云はれて見るさ虎之助も、父の言葉を背く譯には行かないから、其の儘に打ち捨て、置いた、處が其後何う手引をしたものか、青柳は山本新太郎と不義を働らき、屢々屋敷内

に密會するさ云ふ噂を耳にしたる石川彌右衛門、何うも心苦しい事に思つて居るさ、或日田中庄左衛門が他の用向きで出て来た時に彌、扱て庄左衛門殿、其許の娘について實に面白からぬ噂がある、山本數馬殿の伴新太郎と不義を働らいて居ると云ふではないか、其許と拙者とは格別の間柄で、決して他事とは思はぬから、斯く遠慮なく云ふが、少しは注意をせられたが宜からうと思ふ庄、イヤ石川氏、能く言つて呉れた、實は拙者も薄々承知はしているが、仔細あつて親の手で是れを耐する事は出来ぬのだと云ふは其許も御存じの通り、拙者と妻の間に男の子はあれど、何うか一人の女の子を擧げたいと思つて居た處、圖らずも彼女が二才の時であつた、此の向ふの稻荷の軒下に、誰れの子やら判らんが捨子があつた、不慮のものだと思つて拾つて参り、育てあげたのがアノお君で、其後運宜く容貌も

美くしく、實の子同様にして守り育て、女の事一通りは仕込んだ上、尙ほ行儀作法を見習はせんと、お奥へあげて女中奉公をさせる内、早や十七の年頃には云へ、何時か山本の伴新太郎と、間くも汚らはしき噂が立ち、吾々夫婦の残念さ、本来なれば山本の伴と娘を共に刺し殺し、殿様へは畜生同様の兩人を手討ちにしたと云ひ分けをせんと思へども、其れでは山本數馬殿へ氣の毒ではあり、又娘を吾が手に掛ければ、山本も又伴を手討ちにせねばなるまい、殊に又彼の娘が吾が實子なれば決して心配はいたさぬが拾ひ子ゆへに殺すことも出来兼ねて居るのでござる、寧ろそのこと何人でもあれ、他人が手を下して討つて呉れれば宜いと思つて居るが、イヤモウ飛んだことを仕出かされ、面白次第もござらぬ」と田中庄左衛門も思案に暮れて居る様子彌「ウム成る程、イヤ道理千万だ、殺す云ふも不愜ながら、又踏

て、置けば家の汚れ、何うも困つたものだナ」と石山彌右衛門も心配をして居る、是れを物影に聞いて居た石山虎之助、心の中に「ア、其れでは田中の娘君と云ふのは拾子であつたか、先日那の手紙を頼まれた時に、山本新太郎は會津武士として、一婦人の色香に迷ひ、不義を働らく者でもあるまいと思つたが、父の意見に従がつて其儘手紙を渡しもせず打ち捨て、置きしに、彼等兩人は遂に心を通はせ、道ならぬことをいたしたと相見へる、就いて今田中郎の云ふ處に依れば、義理ある子故に手討ちには出来ぬ、誰れか斬り捨て、呉れる者があればと云ふ一言、吾れも此の事に就いては聊か關係もあり、次第に依らば……ウム……」と何か思案の体であつたが、虎之助は其後頼りに二人の舉動に目を注いで居る、此方は新太郎青柳の二人は、段々其の身の事が噂さとなり、人に顔を見られるのも何となく体減わるく、

其れより一ヶ月ばかり経つた或夜のさき、密にかお屋敷の土蔵の小暗き處に忍び合ひ、何か淺はかな相談を遂げて居る處へ、豫て心を配つて居つた石山虎之助、僅か十四才の少年ながら、流石は會津武士の血統だけあつて、二人の跡を尾けて來たものと見へ、突然と其れへバラ／＼と虎、ヤツ不義者見付けた、會津武士の面汚し、御家の爲めに斬つて捨てるツと一刀キリ引抜き様、虎「エイツ」と一聲、新太郎目掛けて斬り付けた、吃驚りしたる山本新太郎、自分が悪いところがあると思つたので身を耻じたか、其儘踵を返して其儘に、彼方の方へドン／＼と逃げ出した、跡に残つた青柳のお君君「アレーツ」と云つて逃げんとする處を、躍り込んで右の肩先きからバラリ一刀斬り込んだ、ウムツと其れへドタリ打つ倒れる處を伸し掛つて遂に其れへ斬り捨て、仕舞ひ、早速駆け戻つて子供の事だから父彈右衛門に此

の事を云ふと、彈右衛門も大いに驚ろきながら現場へ出て参り、篤き様子を見届けた上虎之助を連れて田中庄左衛門の處へ出て來る、委細の事を話すと庄左衛門も、一時ハツと驚いたものゝ、自分の家名が汚れずに済む事だから却つて喜び、娘お君の死骸は自分の家に秘かに引取り、上へは病死の趣きをお届けして、一先づ此方の始末は付いたが、濟まないのは彼の山本新太郎で、此の人も非常に自分の不行跡を耻じたさ見へ、其翌日切腹をして相果てた、是れに依つて始めて此の事が藩主容保公のお耳に入り、僅か十四才の少年の身を以つて、斯かる勇氣のある事をなすは、實に賞むべきことである云ふので、非常に打ち喜び、佩刀、振りを賜はつた云ふ、其後若君喜徳侯本國會津へ歸られた時に、此の石山虎之助もお供をして國へ歸り、其後喜徳侯のお付きさとして忠勤を勵んで居たが、後遂に白虎隊に

100
入り同志の少年烈士と共に、憐れ飯盛山上にて勇ましき最期を遂げたのである。

○御用屋敷の化物退治

お話しが後へ戻る様であるが、尙此石山虎之助に就いては面白い逸話がある、前述の如く此虎之助は石山彌右衛門の養子であつて、實父は同藩井深數馬と云ふ人の次男だが、何しろ幼少の時から却々記憶の勝ぐれた少年で昔話しを聞いて英雄豪傑のこゝになるさ、吾れを忘れて勇み立つて居たと云ふ、十一才の時に藩校日新館に這入つて、文武兩道に達したと云ふので同じ白虎隊の篠田儀三郎と共に藩侯より度々賞典に預かつていたと云ふ。然るに此の石山虎之助が日新館へ這入つた年、同時に入學したのが井深

101
茂太郎と云ふ少年、是れは同藩中にて三百石を頂く井深守之進の長男で、入學したのが十才の春、此の者は又非常に沈着な性質で、人に可愛がられて居つたと云ふ、處が其年九月の末つ方、秋も早や暮れとなつて何とやら物淋しく、殊に今日しもはら／＼と降り出したる村雨は、散りしく木の葉を打ち交りて、夜に入るさ共に風さへ加はり、軒端にバラ／＼と當るは雨か木の葉か、草葉にすだく蟲の音も、聲うら枯れて憐れなり、此日藩中の少年四五人、石山虎之助、井深茂太郎とは、折柄の宿直に當り城内なる小姓御請所に在つて、肌寒き外面の秋雨の音、風の音杯に耳を澄ませながら、顔りに好める昔の英雄、或は豪傑志士、烈士の話し杯をして居たが、其内一人の少年は口を出して○「何と各々方、此の向ふの御用屋敷の前を夜遅く通行すると、何か存ぞぬが年若い女ださか、或は高入道ださか三

1011
 ツ目小僧ださか出て来て、通行の者を喝かす云ふ噂を承わつた、既に一昨晚も城下の生薬屋夷屋佐兵衛云ふ者の番頭喜七云ふ者が、御城内へ御用があつて、歸りは夜中になり、只一人御上の提灯を借り受けてブラク御用屋敷の前を通ると、前から来たのが法衣杯はヨレ／＼になつて見すばらしくも病み衰へたる一人の老僧、オヤ何うも見馴れぬ僧様だと思ひながら摺れ違ひさまに、ヒヨイツと其坊主の顔を見るとき、今まで苦み切つたる顔に物凄くもニコリと笑を含んだので、餘りの怖ろしさに後へ一足踏み返したる其途端、ヌツと喜七の顔を覗き込んだのは、顔ばかりが四斗椀ぐらいもあらうと云ふ大入道、重れ／＼のこさこさてキヤツと云つたまゝ目を眩し、昨朝になつて漸やく命辛ら／＼逃げ歸つた云ふことをごさるが、何と各々方もお聞き成されたか」云ふと他の五六人の少年も、斯んな噂は早や度々あつた

1012
 ことですから、誰れ一人知らないものはない、皆左様／＼、其んな噂さは承りました、併し世の中に化物ださか幽霊ださか云ふものがあらうとは思へません、是リア何か狐狸の類ひが悪戯をするのでございませう〇「イヤ其れは然うかも判らない、拙者も然うであらうさは存じて居るが、何しる町人共が只無暗に化物だ幽霊ださ申して、夜に入るさ此の御城内へ参るのさへ厭ふさ云ふは、御主君の御武威にも關はる事なり、又他藩への聞へも如何さ考へます故、是れより一同が籤取りをして二人を撰み、一人は御用屋敷の化物を見届け、又一人は當若松城の南隅川の地藏堂に駈け付けて、化地藏の前に證據を残し立歸ることには如何でござる、古へより英雄豪傑と云はれた人々は、少年の頃より豪膽にして、左様なことは自から進んで備し、自分の膽力を試したさ申すことをごさる」と云ひ出すと流石日頃よ

り冒險好きの少年、殊に日新館にて日頃教へられたる腕前を試すは、こゝぞ
 と思つたから、皆口を揃へて「皆、イヨウ其れは面白うござらう、其れでは早
 速抽籤をいたしませう」と茲で愈々籤引きをするを、御用屋敷の方へ行く
 のが石山虎之助、地藏堂へ行くのが井深茂太郎の二人に當つた虎、ウム、
 拙者が御用屋敷へ参る籤でござる虎、拙者は地藏堂へ駈け付ける役でござる
 其れでは只今より出張ることにいたそう」と二人の少年は身仕度甲斐くし
 く、両刀腰に打ち込んで袴の股立高く取りあげ、其上に兩合羽を纏ひ、
 菅笠を冠つて蹴足のまゝ、御城内を飛び出し、各々目差す處に急ぎ行く、此御
 用屋敷と云ふのは城外廓の中にある同藩のお邸だが、此節毎晩お化けが
 出ると云つて、夜に入ると誰れ一人通行する者もない、前には濠を控へて
 後ろは深々たる晝向は暗き竹藪、殊に暗の夜杯になると遙かに御城内の火

が見へる斗りだ、四邊は眞に鼻をつまゝれても判らない位ひの淋しい處です
 又一方井深茂太郎の行つた若松城の南方、湯川の地藏堂は、其昔より化
 地藏の名前高く、故老の云ひ傳へには其近くに一軒の郷士屋敷があつたが、
 或夜の、こゝ此地蔵堂より恐ろしき化物出で、郷士の家内す餘人を残らず喰
 ひ殺し、當時の領主より屈強の武士三十人斗りを選び出して、此化物を退
 治せんとした處が、其時は何の事もなかつたが、五六人の武士を遣ると誰れ
 一人附つて来る者もなく、再び大勢の人数を集めて化物退治に差回れると、
 今度も又元に異ならないが、只彼方此方の杉の木、松の枝に昨日の武士の生首
 が吊り下げてある上に、頭の無い死骸は途の中央に投げ出されてあると云ふ
 有様で、向ふ正面にある石地藏が聲を出して笑つたと云ふ處から、遂に化地
 蔵の名を得たのであるが、其後は誰れ一人として此處に参詣をする者もなく

百數十年間荒れ果てるまゝに捨て、あるものですから、其物淋しき婁きことば、筆にも言葉にも盡されない位ひだつたさ云ふ、然るに此宵は秋の末、木葉に交る村雨は、軒を打つてバラ／＼／＼、ザーツザツと四方の山々より吹き下す木枯の音さへて、夜は深々更け渡り、一天宛然ら磨墨を流したる如く、婁まじきまでに物淋しい夜であつた。斯る淋しき婁まじき夜を事とせず、今し方子刻のお時計の音を聞いて、若松城内を立ち出でたる二人の少年、見れば雨合羽に饅頭笠虎「茂太郎殿、では此處でお別れ申す、朝までにはお歸りでござらうナ茂」ハイ、必らず無事であれば朝までには歸ります、其れでは御免虎「御免下さい」二人は右さ左りに立ち別れた、此方石山虎之助は井深茂太郎に別れて只一人、黒白も分かぬ闇の中を、跋足の儘にヒシヤ／＼泥濘の中を踏みしめ／＼、漸やく出で来たのは二の丸外の御用屋敷

折りしも降りしきる村雨は、果に交つて濛の水音を和し、ザーツザツと婁まじき音を立て、後ろにある竹籬はザラ／＼／＼と落葉して、四邊りは鳥羽玉の中に只一際、白くうつろは御用屋敷の白壁の色か、虎之助は笠を傾けて雨を避けながら、暫らく屋敷の前を行きつ戻りつ、怪しきものあらば只一討ちさ、双の腕に満身の力を込めて、ツツと刀の柄に手を掛けた儘、プラー／＼と一時ばかりの間歩行き廻つて居たが、別に是れぞと云つて怪しいものはない、拍子抜けのした石山虎之助、スタ／＼と屋敷の軒下に駆け込んで、濡れたる合羽をばらひながら虎「何アんだ馬鹿／＼しい、怪しいものが出る／＼と云つて居るが、何んにも出やアしない、モウ一時ばかりもプラー／＼したのだから、此の儘立歸つても宜いのだが、其れでは後で證據がない杯と云つて疑はれては片腹いたい、ヨシ斯うして遣らう」と持ち合した

一〇八
る小柄を抜き取り、門の柱にグツと突き刺し、尙も四邊を能く見定めたる上、又もやアラリく御城内差して引返し、待ち受けたる若武士の面々に此の事を云ふと、皆其の豪膽に驚き、其翌朝御用屋敷の門前に行つて見ると、小柄を懷紙に包んでもし雨に濡れても錆びぬ様と云ふ心使ひをなし、柱に突き刺してあつたので、家中の人々は皆其用意の周到なものと、勇氣のあるのさに舌を巻いて驚いたと云ふ。

○烈士井深茂太郎の逸話

處が一方井深茂太郎の方は何うであつたかと云ふと、城外にて石山虎之助に別れた後、一里ばかりもある道を跋足の儘に一散走り、今しも湯川の邊り地蔵堂の前まで出て来て見ると、百幾十年の間荒れ果てたる境内は、身の丈

けばかりの芒、千茅の生ひ茂り、折しも小止みに成つた村雨は、ポトリくさ名残りの滴ん落し、尾花は風に連れてザラ／＼と倒れては起き倒れては起き、宛然ら生あるもの、如くに見ゆる中を、勇氣に満ちたる井深茂太郎は、尙も足に踏みじめく、漸やく地蔵堂の前なる椽の處へ来て見ると、柱は傾むき軒は破れ、椽側と云へば名ばかりにて、處々朽ちて穴の明いたる處より、名もなき雑草僅かに枝葉をあらはし、腰を下す處もない位ひだつたが、漸くの事に其れへ腰を掛け、懐中探つて取り出したのは用意の紙蠟火打石の火を移して紙蠟を燈し、風に吹き消されぬ様に合羽の袖に覆ひながら、地蔵堂の中へ這入つて四邊を見廻すと、真中に立つたるは身の丈け六尺ばかりなる一個の石地蔵、其他には別に荒れ果て、居るばかりで、怪しいものもない様子、篤き見定め茂太郎は、何ぞ思つたか自分の前をまくつて

突然に地藏の胸の邊りから下へ掛けて、シヤーツツと小便を垂れ掛け、ズツと唾液を吐きかけて後茂、コリヤ化地藏、其方は昔しより化地藏と人に云はれて、様々な悪戯をしたそうだが、此宵の此の醜体は何だ、人に小便を仕掛けられ、唾液を吐き掛けられても、無念さは思はないか、萬一無念さ思ふならば、拙者は未だ夜明けまで此の邊りをうろつく考へだから、何うでも考へ通りにして見る、又其れ程其方に神通力があるのなら、貴様の邸たる此の堂も、今少し綺麗にしては何うだ、第一佛の身として人を助けるどころか、却つて人に害を興へる杯さは實に不埒千萬な奴ツだ、以後の見せしめに斯うして呉れると云ひながら、持ち合したる鐵扇にてカチリ地藏の鼻を欠き取り、懷中に押し込んで、尙も其の邊りをグルグル二三度歩行まわつて見たが、別に怪しいものも見へないから、又もや堂内に戻つて夜のホノホ

ノと明け放れるまで其處に休み、曉告ぐる鐘の音を聞いて、又もや一里ばかりの途をスタスタ若松城内へ立ち歸つて来るさ、家中の人々は大いに勇氣に感じ、皆オオ井深氏、何うだつた茂、何アに化物も何も出やアしない、實は昨晚斯うく斯様くであつた、其證據には是れ此通り地藏の鼻を欠いで持つて歸つたぞ、サア見て呉れ」と其れへ投げ出したのが地藏の鼻、皆オオヤ、是リア面白い茂、世の中にお化け杯、いるものでない、竟り臆病者が自分の心で拵らへるのだ」と云つて、會津城中の大評判になつていたと云ふ、誠に此の二人の如きは、會津武士の曲型と云つて宜い人物であらう是れで此井深茂太郎は、一方に斯様な極めて剛膽な處があると共に、又一方には非常に優しい心掛けがあつた、或日城下の松並木に、七八才ばかりの幼児を連れた老人が、病み衰へてヨホくと途端に寝て居る姿を眺め、如何

にも可愛そうだと思つたものか、ツカ／＼ツと近寄つて来た茂太郎、茂、オイ
 く爺さん、何うしたのだ、斯んな處に寝て、病氣でも起つたのか、苦しそ
 うに顔を擧げた彼の老人は、老、ハイ能くお訪ね下さいました、私しは當城下
 片原町の者でございますが、身体の壯健な時は、餉賣り杯をして其日を送つ
 て居りましたけれども、先般て家内の者に死別れ、かて、加へて私しは中風
 の病氣、一そ淵川へでも身を投げて此の苦患を免れたいさは思ひまするが、
 只一人の此の子供に心を引かれ、死ぬにも死ぬ苦しみないして居りま
 す、處が昨日より貰ひに行く事も出来ない位ひに身体が自由が利かず、食は
 ず飲まずでツイ此處に倒れて居つたのでございませうと涙ながらの物語りに
 茂、然うか……と云つた儘茂太郎はホロリ／＼と涙を流して居りました
 何と思つたものか自分の懷中に手を差し入れ、漢學の先生の處へ持つて行

く月謝の金、紙に包んだまゝのやつを取り出し、着て居つたる羽織を脱いで
 クル／＼ツと其の中に包み茂、ソレ爺さん、是れを遣るよとバツと投げ與
 へた儘、後をも見ずにドン／＼と吾家を差して駈け戻り、父母に此の事を
 云ふと、父母も茂太郎の仁心を喜び、厚く賞められたと云ふ事がある、烈
 士の一面には又斯くの如き涙があつたものと見へる、又篠田儀三郎と云ふの
 は、藤高二百石を頂いていた篠田兵庫と云ふ人の次男であつたが、幼少の時
 から至つて正直で、虚言杯は第一に嫌つていたと云ふ、其の六七才の頃、朋
 友と日を定めて螢狩のこゝを約束していたが、處が其約束をした日の暮
 れ方から大雷雨で、加ふるに暴風となり、到底も螢狩杯とは思ひも寄らな
 い日であつたが、豫て約束の時刻になると儀三郎は、螢籠を提げて其約
 束をした友達の家へ出て参り、窓の外から其少年の名を呼んで、螢狩に誘

ふた、其友達らは驚いて友「斯んな雨天に、鶯の飛んで居そうな筈がない、何んで態々歩つて来たのか」と問ひ掛けた、スルト備三郎は却つて不思議な顔をして「儀」オヤ其許は早や忘れたのか、今日は僕で君と約束した通り、鶯時に行く日だから、鶯の取れる取れないに係はらず、約束に依つて歩つて来たのだが、併し然う云ふ事であれば、鶯時を又日を改めて決行しやう左様なら……」と云つて其約束を解き、風雨を犯して自分の家に歸つた。云ふ、又或る時友達の家へ寄り合つて、武術の話した仕様と約束をしたが折しも冬のこころ朝より雪が降り積り、前日來より降り積つたる雪は二尺に餘り、身を切る様な風はヒューツツと吹き捲り、殊の外寒氣を覺へて内に居つても慄へ上るほどの寒さであつたものだから、今日は誰れも来る事はあるまいと思つて、其の家でも態々構へて居ると、儀三郎只一人は高

足駄を手拭で括り、其れを手で提げて跣足で出て来たので、其友達らの家内の人々も大いに驚ろき、約束を違へぬのを賞めて儀三郎を厚く待遇した。云ふ、斯んなことで僅か六七才の時から、篠田儀三郎の正直さ云へば家中一般誰一人知らないものはなかつたと云ひます、又伊藤俊彦と云ふ少年は、同藩伊藤新作の長男で、食祿は僅か五人扶持であつたが、祖先より貯へたる財産で、家は富み榮へ、殊に父母は非常な慈善家で、門に立つ乞食は一人も其の儘で歸らした事はなく、冬の寒い日杯は態々城下外れの松原へ出て食に飢へたる乞食等に其れ／＼辨當、或は金錢杯を悪んで立歸るのが一つの道樂であつた、又子息の俊彦は幼少の時より自分の家の系圖を見て、藩祖保科正之侯以來、代々の主君に仕へた自分の祖先が、國の爲めに千軍萬馬の間を馳廻り、功名手柄を現はしたる事を聞き、口僻の様に俊「私しは

私わたくしの力ちからで、イザ事ことある時ときには必かならず拔群まつぐんの功こうを樹たて、祖先せんぜんの名なを表あらはすのである」云いつて居いたが、遂つひに白虎隊びやくこたいの中なかに加くわはり、後年こうねん飯盛山いもりさん上じやうの露つゆを消きへながら、望のぞみ通とほり祖先せんぜんの名なを擧あげ、家名かめいを輝かがしたが、身みを立て名なを擧あげ、父母ふぼの名なをあらはすは孝こうの終しゆりなり云いふ孝道こうたうの終しゆりを全まつた。實じつに忠臣ちゆうしんは孝子こうしの門もんより出い出す云いふに違ちがはない、又また隊士たいし石田和助いしたわすけの父ちちは石田龍いしたりゆう玄けんと云いつて、始はじめは百姓ひやくしやうの出でて江戸えどに出いて醫道いどうを學まび、國くにへ歸かへつて會津藩主あいつゆんしゆの侍醫じい勤つとめていたが、此こゝ石田和助いしたわすけの實兄じつけい云いふのは、數年前すんねんぜん福島縣ふくしまけんの知事ちじであつた日下義雄くさかよしおと云いふ人ひとです和助わすけは十才じゆさいの年としに日新館にっしんかんに入り、成蹟せいせき拔群まつぐんの爲ために屬々そとと賞與しょういを受けて居いたが、只ただ一つ變かわつたこと云いふのは、幼少ようせうの時ときから非常ひじやうな酒好きさけずきで、日新館にっしんかんからの歸かへり途みちには、未まだ十一才じゆさいの少年せうねんでありながら、親類しんるいの家いへに立ち寄よつて、ズツと臺所たいどころへ打ち通とほり、黙止もくしつて

酒さけを傾かしては獨ひとりりでグイ／＼煽ふり付つけ、陶然とうぜんとして酔よひが廻まるさ其儘そのまゝ又また默然もくぜんとして自分じぶんの家いへに歸かへつて行くのが殆ほとんど隔日かくじつであつた云いふ、然しかに此この和助わすけの家いへは前述ぜんじゆつの如ごとく百姓ひやくしやうから出でたので、日新館にっしんかんの朋友ともだち杯はは事ことがあるさ皆みな「何なにんだ、土百姓どひやくしやうの成なり上あり者もの奴め」と嘲弄てつぷするさ、和助わすけは怒おこりもせずなに莞爾にんごと笑わらひながら和おほし仰おほせの如ごとく拙者せつしやの家いへは百姓ひやくしやうから待醫まちいになつたのだから、全まく成なり上あり者ものに相違さういない、がしかし御貴殿達ごきでんたちの家いへは、昔むかしから随分ずいぶん尊そんい祖先せんぜんから出いて、却かへつて今いまの名なは祖先せんぜんに及およばず、又また祿高ろくたかでも祖そ先せんよりは下さつた位くらひだから、御貴殿達ごきでんたちは祖先せんぜんの名なを辱はづかしむる。成なり下さり者ものだ、けれども拙者せつしやは常藩じやうはん、或あるは此この日本國にっぽんこくに大騒動だいさうどうでも起おこつて、スロ戦場せんじやうと云いふ場合ばあひには、決けつして人後じんごには落おちない考かんがへだ、先まづ成なり下さり者ものは成なり上あり者ものの舉動さうどうを見みているが宜よからう」云いひ返かへして居いたが、言葉ことばに違ちがはず

後年白虎隊に加はつて、大人も及ばぬ勳らしきを爲し、運盡きて飯盛山上
悲壯なる最期を遂げた。

○何れが梅、何れが櫻

池上新太郎は同藩青龍寄合牛隊長、池上新太郎云ふ人の子で、愈
々父が出陣をする時には、未だ白虎隊杯は城中で籠城の仕度をして居た時
ですから、少年の出陣する杯は思ひも寄らなかつたが、無理に母に願つ
て父の軍に従ひ、初陣に敵方の首を取り、大いに其勇氣を歌はれ、後白虎
隊に編入の命があつたので、愈々吾が力を試すべき秋なりと、真先きに戰場
に出たが、白虎隊の内でも此の人杯は、最も早く戰場を駆け廻つたのであ
ります、林八十次の父は林忠藏と云つて、日新館の教師であつたが、父

忠藏は心の中に忠常に斯く他人の子を教育して行くものは、殊に能く自
分の子を教育して行くことが出来なければ不可なりと思つた處より、朝は
鶴鳴に起きて武術を教へ、夜は日新館より歸ると直ぐ、手許に呼んで書物
を讀まし、其れが終ると其翌日教へる處を下讀のさせ、萬一判らない處が
あると如何なる夜更けでも決して寢床に入れなかつた。斯様に嚴格にする一
方では、劍術でも柔術でも、或は文學の方でも、意外に出來の宜い時に
は、必らず口を極めて賞めそやし、所謂寛嚴其宜しきを得て居たので、
藩中少年の模範とせられて居たのであります、鈴木源吉云ふ少年は、御
典醫鈴木玄甫の次男で、十才の時日新館に入り、後愈々白虎隊が
陣をするに云ふ際に、兄の小太郎は家に傳はる冬廣の短刀を源吉に與へ、少
其方萬一負傷杯の爲めに敵に擒さなつた其時は、早く此の短刀を以つて自殺

し、決して敵に辱かしまれられない様にいたせ」と云つたので、源吉は只一言
 源「ハッ豫て心得て居ります」と言つたがり、其短刀を押し頂いて勇まし
 く城内に駆け付けた、築瀬武次の門出は何うかさ云ふさ、父久人は二尺五
 寸、大兼光の大刀を武次に興へて久「コリヤ武次、此の度びの戦ひは其方
 も知る如く、敵は大勢味方は寡勢、到底も勝算は覺東ない、たゞ潔よく身
 命を當會津藩に捧げ、決して未練の舉動があつては相成らぬ、不幸にして斯
 く戦ひはいたすものゝ、君侯の誠忠にて聊かも私曲の無きことは、天地神明
 の知ろしめす處であるから、其方も決して再び生きて還ると思ふな」と呉れ
 く言ひ渡して城内に送り込んだ、又飯沼貞吉と云ふのは、同藩の物頭
 飯沼時得と云ふ人の長男であつたが、明治元年八月二十二日の朝、城内なる
 隊長日向内記から、愈々白虎隊出陣の使ひが来るさ、飛び立つばかり

に喜び勇み、早速身仕度をして両親に訣別を告げるさ、母親は吾が子の勇
 ましい門出の姿を見て、一首の和歌を認めて是れを勵ました、其歌は、
 捧弓むかふ矢さきはしげくさも、
 ひきなかへしそ武士の道、
 貞吉は此の勇ましい歌を見て大いに打ち喜び、軍服の襟に此の短冊を縫ひ込
 み、一日散に城内へ駆け付けんさす、其當時此貞吉の家には、藤助と云ふ
 律氣一編の忠義な下男が居りましたが、十三年の間一日の如く飯沼家に仕へ
 今日しも貞吉が勇ましく出陣するさ云ふのを聞いて、老ひの目を瞬きな
 がら打ち喜び、藤「オ、若様のお勇ましい此の武者振り、何うぞ天晴れ手柄
 をして、此の藤助を喜びばして下さいます様、私しは其れを現世の土産に
 いたします」と言ひながら、自分の身の如くに立ち働らくので、藤助を連れ

て城内へ行く途次、豫て可愛がつて呉れたる同藩の家老、彼の西郷頼母の家に立ち寄つた。處が此頼母の妻千恵すは、貞吉の父時備の妹、貞吉の爲めには叔母に當る人だから、此の勇ましき姿を見て様々云ひ勵まし、頼母の母律子も病床より態々起き出で、玄關口に出で來り、親切なる教訓をして、其他同家の人々は皆門出を勵まして呉れたので、貞吉は其の志しを打ち喜び、最後の暇乞ひをして時遅れし西郷の邸を立ち出で、其の門口で藤助を邸へ歸し、轟然に城内へ駆け付けた。尙一人茲に忘るべからざるものは、同じく白虎隊士の内、藤次郎が出陣の一隊であります。此藤次郎の大叔父は、藩中でも他國にまで其武名を語られたる柔術の達人で、幼少の時より其人に就いて柔術を修め、既に十五才の時に免許を受けた、殊に自分の屋敷が有名なる砲術家、山本覺馬と云ふ人の邸と隣り同志で

あつたから、早くより砲術にも却々勝れて、成人の後は一隊の人物になるだらうと言はれて居た、處が明治元年八月二十二日、愈々會津藩の危急で、白虎隊出陣と云ふ時には、其年僅か十五才であつたから、白虎隊に入つて共に戦陣に臨むことが出来ない、其當時の定めとして白虎隊の出陣するのは、十六才と十七才の者ばかり、スルト愈々二十二日の朝になつて彼の日向内記の命に依り、白虎隊若武士の面々は、彈丸飛び交る其中を、勇ましくも両刀を帶し、身仕度甲斐しくして皆城内に馳せ集まる姿を眺め、又日頃日新館で机を並べ、忠孝の教へを聞き、武術に鍛練した身体の藤次郎は、其友達ちが揃ひも揃つて初陣にのぞむ事を聞いて、羨ましくて堪らない、今しも奥の間で家の片付けをしている父の前に出で参り、アノお父上、一寸私しお願ひがございます、父「ウム、願ひと云ふのは

何だ、他でもございませんが、先日まで日新館で同じ様に學問をして居つた友達は、皆那の様に白虎隊の出陣だ云つて城内へ駆け付け、初陣の功名をせんさ勇んで行きます、然るに私しは當年十五才、僅か年齢が一つ足りないばかりで、其の行を共にすることが出来ません、何卒私しの年を一年丈け多く届けて下さい、戰場に出て必らず花々しき働らきをなし、一命を御主君の爲めに捧げますから……」と願つたが、何しろ律義一編の會津氣質を受けたる父は、更に此の願ひを聞かない父「コリヤ、佛次郎、其方の志しは誠に殊勝なれど、お上の御錠に背き、年齢を欺はる杯云ふ事は出来ぬ、其の心を以つて静かにお上の仰せを待つて居つたら宜いのだ、佛、其れは父上不可ませぬ……アレ、又友達ちが城内へ乗込みます、僅か年が一つ位ひ少ないとて、決して働らきの出来ぬことはありますまい、殊に私しは叔父上

に就いて、柔術の一手二手は習つてありますから、決して他に劣を取る様なことはいたしません、何うぞ父上、お上へお願ひ遊ばして下さい、然うでなければ私しは、友達ちに對しても面目を失なふ譯いございます故、寧ろ切腹をして相果てますと父が取り合はなければ取り合はない程、出陣する少年が自邸の前を通行する様を見て、堪らなくなつて再三再四父に願ひ、何うしても不可ない云へば、決心をした顔色ですから、父も流石愛子の健氣なる其志しに心を動かされ、父「其れでは一應お上へ願つて見るから、暫らく待つて居れ、必らず逸まつたことをしては相成らぬぞ」と急ぎ仕度もそこへ、城内に参り、隊長日向内記を訪ふて佛次郎の願意を話し、父「何卒佛次郎出陣の義を願ふ」と云ふと、内記も佛次郎父子の志しに感じ、軍規を破ることは出来ないから、假りに佛次郎の生年月日が誤まつて

居たこと云ふ届けにして、始めて白虎隊に編入させ、他の少年と共に出陣させることに成つたが、躍り上つて喜こんだ徳次郎は、父母に別離の言葉を瘦し、欣然として出陣をしたこと云ふ、斯くの如く會津白虎隊烈士の門出所謂群芳研を競うこと云ふ有様で、何れ勝り劣りはない、此方が梅の如く嵩高の趣きを備ふれば、彼方は又櫻の純潔なる風情を持ち、桃、季、梅、櫻、殊に千紫萬紅の美はしさ、皆一死國難に殉ずるの會津人士の血を受けて其れく勇敢無比なる半生の行爲、又門出の悲壯なる有様を演じたので、其の年齢の十六才に満たざる少年は、其先輩なり又朋友の少年烈士の初陣を見て、羨望の的とし、年齢の足らないのを口惜しがつたのであります。此外にも同じく飯盛山上に悲壯なる最期を遂げ、少年烈士が半生の逸話はあるが、其れは一先づ後に譲り、回を改ためて愈々會津白虎隊奮戦の事實

隊より、飯盛山上に於ける悲絶、壯絶なる有様に移りませう、

○風雨中白虎隊の奮戦

斯くて勇ましく城内に駆け付けたる是等少年烈士は、隊長日向内記の命令に依つて、總て揃ひの陣笠を冠り、揃ひの武者姿で、出陣の時今や遅しと相待つて居る、是れが古へ戦國の時代であれば、年が僅かに十二三才の少年にして、或ひは敵の陣に送られ、或は十五六才にして初陣をなし、千軍萬馬の間に馳驅して一簾の功名手柄を現はしたる少年の勇士は澤山にあるが其後世は昌平の春を詠ひ、殊に徳川幕府三百年間の泰平は、槍は袋に刀は鞘に、弓は長押に名残りを止め、只管ら風流、奢華に趣きたる時代になつては、又再び斯ることもあるまいと思つて居つたのに、區らずも徳川の流

れ亂れて、七百年來の昔しに返る、王政維新の芽出度き始めに、會津戦争といふ思はしき事起り、未だ年若き少年烈士が幾十人、藩國の爲めにさて其の身命を捧げ、花々しく出陣せんとする志し、さては其勇ましき武者振りを見ては、血氣隆んなる藩士は云ふまでもなく、年老ひたる父老も、將又かよわき婦人にいたるまで、痛く感じ入りて悲喜何れも涙が目に溢れ、吾れも又共になりたきものと勇み立つた、斯くて愈々出陣の時來り、會津城中を出發するに當つて、此の三十七人の少年白虎隊の一連は、教導篠田儀三郎は音戸を取つて関聲きを擧げるさ、其他の少年烈士は皆是れに和して、ウワーツワツと鯨波の聲を擧げ、隊長日向内記に率ひられて、隊伍肅々、威風凛々として今日しも會津城門を出で、心中に城門に向つて最後の訣別を告げながら、若松を去る東方一里ばかりなる瀧澤村に到着した、此の瀧

澤村には會津の本營が置かれてあるので、藩主松平容保侯も此の本營に出陣して居たので、白虎隊の内一部は此處に止まり、其他は今や戦争將に酣なる戸の口原に向つて押し出した、間もなく戸の口原に着する日は既に暮れ掛つて歸りを急ぐ群鴉の聲も淋しく、官軍は早や此の時猪苗代を陥れ、十六橋に迫らうと云ふ時であつたから、白虎隊は敢死、遊軍の二隊と共に、此の戸の口原に於て群がる官軍を喰い止めんす凄まじき勢ひにて死物狂ひに防禦の陣を張つているさ、今しも勝ちほこつたる官軍は、宛然ら破竹の勢ひをもつて十六橋を渡り、先鋒隊長川村與十郎の一隊は、ドツと斗りに潮の漲り渡る如くに押し寄せて、ウワーツワツと云ふ関波の聲は、殷々たる砲聲と共に天地に響き、砲煙天に漲り、白煙モウ／＼として、其間に戦旗は揺々として諸隊の中へ翻へり、鎗戟は森然として閃光を放つ凄

まじさ、シユツ、シユツと云ふ怪しき物音は、頭上を飛び交ふ小銃の彈丸、誠まことに天地もふるふ斗ばかりなり、然るに此方會津勢は、本城の安危かゝつて此の一戦せんにありさ。死力を盡して防戦すれば、官軍の本隊は更らに雲霞の如く押し寄せて、眞先まつきに立つたる川村與十郎は、阿修羅の如く荒れに荒れて、三尺有餘じやくいうよの秋水しうすいを頭上にかざし、砲煙ぱうえんの爲めに眞黒になつたる顔色に、怒れる眼物まなこもの凄く、大喝たいかく與進すゐめ一ツ、進め一ツ……」と號令を下しながら攻め寄せるから、此方會津勢も力戰奮闘、死屍積んで山をなし、鮮血流れ、川を成したる其間を、踏み越へ飛び越へ、白刃を揮つて官兵に當り、既に時は夜半にいたるも兵を改めず、折柄おりがら篠突しのつくばかりの大雨は風を交へ、ピツ、ピツ、ザツ、ザツと暗さは暗し眞の闇、閃めく白刃は稲妻の如く、夜半の音、大砲小銃の響き、天地も顛覆るかと思ふ斗りであつた、處ところが此の特

官軍の方略くわくとして、重に中軍と右翼とを射撃したので、遊軍、敢死の二隊は、今や殆ど彈丸を撃ち盡し、絶体絶命、〇ツレ突けくツ」と一聲の許、白刃を振りかざして敵中に躍り入り、縦横無盡に斬り捲つたので、討死するもの數知れず、白虎隊は何うかさ云ふさ、此の時敵の右翼を守つて居りましたが、今しも官軍の爲めに烈しく攻め立てられながら、〇「引くなッ、引くなッ、會津武士の手並はこゝだッ、一歩も引くなッ……進めッくッ」さ叫び合ひ、一死國に殉ずるは將に此の時なりと、彈丸雨注の間を、のさめせず互たがひに助けつ助けられつ、一生懸命、夢我夢中に成つて戦つた、處が其夜は生憎くの大雷雨、大風で、白虎隊の携へていたのは皆火繩銃であつたら、火薬が雨の爲めに濡れて仕舞ひ、一向用に立ちませんから、少年烈士は言ひ合したる如く、腰なる長劍ギラリと抜き放ち、彼方此方敵に涉り

合ひ、鎧を削つて戦つたが、何しろ味方は小勢、敵は多勢、衆寡敵せず味方の多くはバタリく、斬り倒され、残る者は殆ど半分位ひの人数になつたから、血の涙を吞んで今は仕方なく、隊長日向内記に従ひ、再擧を圖らんと會津勢は、本道、強清水と赤井谷地に退き、征討軍を狭み討ちにせん計つたけれども、官軍は隙もなく押し寄せて早くも強清水の軍を破り、續いて赤井谷地の白虎隊も、憫れむべし征討軍の爲めに討ち破られて、加ふるに隊長等と別れて仕舞ひ、一隊餘す處僅かに二十人となつてしまつた、此時篠つく如き雨はますます降りしきり、風は吹き荒んで其音、物凄く、一天宛然ら磨墨を流したる如く、官軍の追撃はますます急にして、到底も支ふる事が出来なくなつたから、白虎隊の烈士は手ん手に血汐のしたる大刀を引提げ、互ひに助け合ひながら一團となつて殘兵二十人は十町斗

り此方の一つの小高い岡に退却し、劍を杖つき血をすゝつてホツと一息吐いて居ると、遙か向ふ金堀の裏手に當つて、ト、ト、ト、ドーン、バリ、バリ、バリ、上つた一少年は少「ヤツ今、金堀の彼方に関の聲の聞へたるは、必定戦ひの始まつて居るに相違なし、イザ是れより彼方に馳せ向ひ、縦横無盡に働いて、最期の命を潔くせん、サア各々、お進み成さいツ」と既に駆け出さうとする様子に、側に休んで居たる西川勝太郎は之れを押し止め西「イヤ其お言葉は道理ながら、今斯く隊長に別れたる一隊が、一人くに進退した處で到底も勝算はあらず、暫らくお待ち下さい」云つて居ると他の少年烈士も聲に應じて「〇如何にも西川殿の云はる通り、殊に吾々斯く小勢で如何に死物狂ひに奮戦した處で、到底も敵の進路を遮る事は出来ない

如何いたしたら宜からう」と言つたが、此の時白虎隊は朝から殆ど絶食、甚だしく飢へに迫り、且つ此の激しき働きに身体は綿の如く疲れて居るので、其中の一少年は、少「斯く成る上は到底も力及ばず、寧ろ此處に自殺して國難に殉し、臣子の務めを果しては如何でござる」西川勝太郎は再び是れを止め、西「イヤ假令へ斯く不幸にして敗軍となつたもの、尙彈丸もあれば又刀も折れて居ない、其れよりは何かして若松城に歸り、御主君の御様子を窺がつて後、刀折れ矢盡き馬斃れて始めて義を取り、生を捨つるも遅くはあるまい」と云ふと、一同の烈士は皆是れに賛成をして、皆「ウム成る程左様でござる、味方が此の有様にては、君公の運命も覺束なしと思はれる故一先づ瀧澤村に引返して、君公の安否を伺がつた其上、吾が一隊の運命を定め様、各々方、氣を注げられい」と、金堀の間道より一行二十人、影

の形に添ふ如く、銃を肩にし刀を杖にし、噫々たる山道、平曠たる溪路を踏み分け、或は激戦に身体疲れ、或は飢餓に迫り、或は鮮血淋漓たる負傷に膺みながら、勇氣を振ひ起して其他の明け方、漸やく瀧澤時の麓まで出て参り、遙かに向ふを眺むれば、令しも數千の軍勢は、本道より若松城下に向つて進んで行く様子に、「〇」占めたツ、是れは必らず味方の軍勢が、城中に歸るものであらう、各々方、一擧に聲を掛けて見様、……「オーイツ、オーイツ」を聲を揃へて呼はるさ、這は抑も如何に何の答へもなく、全軍此方を振り返つて一團の白虎隊の姿が目に入るや否、不意に銃を揃へてド、ド、ド、ド、ドと射撃を始めたので、此方白虎隊の少年烈士は、少「ヤツ扱ては早くも官軍は、既に瀧澤峠を占領したか、モウ此上は仕方がない、引け、引け」さ道を左方に轉じてドツと斗りに引返し、戸の目堰門を稱へて、

山の一隅を數十間掘り穿つたる洞門に入り、其れより間道に入つて窺かに城門へ這入らうと云ふ計畫を立てた、

○飯盛山上悲絶壯絶の最期

處が此時官軍の先鋒は既に若松城下に肉迫し、後隊は尙瀧澤峠に陣地を敷いて居たので、今しも白虎隊の一群が官軍に追撃されて戸の口堰洞門に入らんとするを見るや、ソレツと云ふなり筒口揃へて釣瓶撃ちにド、ド、ド、ド、ドと打ち出したので、彈丸は宛然ら霞の如くに飛び來り、今しも逃げ後れたる少年烈士は皆「ソレ退却ッ」と云ふなりドン／＼ドン／＼に逃げ出したが、中に立つて居た隊員永瀧雄次は雄「アッ」と一聲其れに打つ倒れたが、忽ちムツクと跳れ起きて雄「何をッ……」と劍を杖にし立ち上つ

たけれども、流彈の爲めに左腕を撃ち抜かれ、出血はトウ／＼と流れて潮の如く送り出で、見るも無惨の有様に、他の少年烈士は大いに驚るき ○「ヤッ永瀧君、何うした、確かりしろッ」雄「イヤ／＼決して心配はいらぬ、ナア二大したことはない」と云ひながら歩行うとしたが、何しろ出血甚だしく、見る内に顔の色も蒼ざめて、次第／＼に歩行も不自由な様子 ○「サッ永瀧君、無理をしては不可ん、肩へ倚ッ掛り給へ、サア此方／＼……、ソレ石があるよ……」左右からは是れを助けて、辛くも其洞穴を潜り抜け、辨天社の神前に出で、是れから瀧澤村の背後なる、飯盛山に登つて來た時には、何時の間に落伍したものが、一行僅かに十六人と成つてしまつた、一同は漸やくの事に疲労したる身体を、あへぎ／＼飯盛山上に登つて向ふを見渡す、此時官軍は既に城下に攻め寄せたものと見え、城下の四面は皆官軍の旗

飛へり、此處彼處には火の手が登つて、炎々天を焦がす如く、大砲の音、
 小銃の響きは殷々轟々として天地を動かす、若松城は硝煙漠々の中に
 包まれて、白亞まばゆき五重の天主閣は、只暗憺として色もなく、會津
 城下は既に焦土ならんす有様、十六人の少年烈士は此の光景を飯盛山上
 より臨み見て、早や既に城は陥いつたものさ考へ、無念の齒を噛み鳴らし、
 九腸寸断の思ひをなし、互ひに顔と顔を見合して一言もない、其内に一人
 の烈士は○「ウムツ如何にも残念だ、ア、お城は今に落城するのだ、吾々
 敵中に斬り入らんも、斯く身体は疲れ傷を受けては、ア、二重三重に取り圍
 んだ中を潜つて城へも歸られない、何うしたものだらう」と云ふさ又一人は
 △「寧じ仕損じて生捕り杯の耻辱に遭ふのは残念千万だ」と案じて居る内
 又一人は聲高く○「斯く主家亡び城は落ちたる上は、既に吾が事は了つたの

だ、一死以つて君恩に報ゆるは將に此の時であらう、只土に歸るのたく……
 さ云ひ出したので、一同の人々も決然として皆オ、然うだツ……」さ一同
 其れと云はれぬ愈々此の飯盛山上に自殺する覚悟を定め、十六人の烈士は
 ズラリと其れに土下座をなし、潜々たる紅涙と共に遙かに恭しく城を拜し
 各々最期の用意に取り掛つた、其中にも當年十六才なる飯沼貞吉は、是れ
 ぞ此世の名残りとして、豫て母より賜はつたる短冊を、軍服の襟の中より取
 り出し、悲壯なる聲を絞つて高らかに、
 捧弓むかふ矢先はしげくさも、
 ひきなかへしぞ武士の道
 さ讀み上ぐれば、篠田儀三郎と云ふ今年十七才なる美少年は、聲爽やかに文
 天祥が正氣の歌を口吟んだ、スルト今まで負傷に憐んで、息も苦しげなる石

田和助は、此の篠田の吟聲の終るを聞いて莞爾と笑みながら、苦痛の聲を張り上げて、

人生古へより誰れか死なからん、丹心を留守して汗青を照す、

古詩を吟じたる後、和「各々方、拙者見らるゝ通り手疵苦しければ、一足

お先へ御免ツ……」一言、両肌押し脱いでギラリ大刀抜き放ち、吾れと吾

が腹へグサツと突き立て、和「ウームツ」と美事に右へ引廻してカツバの前に

伏し倒れた、是れを眺めて篠田儀三郎も、續いて義「拙者もお先へ御免下さ

い」吾れ遅れじと杖にせる一刀を逆手に取り、自から咽喉を貫いて相果てた

處が茲に林八十次と云ふ少年は、日頃同年なる永瀬雄次とは、極めて親し

くした間柄で、豫れて出陣の時より、死なば諸共と約束して居たので、

向ふに睨み苦しんで居る永瀬雄次の處に立ち寄り、八「サツ永瀬氏、豫ての約

束は今此時である、お互ひに死處を共にせんと言つた通り、死後の物笑ひを受けぬ様、差し違へて死のうではないか、雄「オ、林氏が、有難う、去らば……八「ウム確かり突けツ」お互ひに聲を勵ましながら、林は刀を取つて永瀬の胸に當て、永瀬は林の咽喉に刀を當て、雄「宜しか、八「ウム宜し、ソレツ」と双方一時にグツと刺し違へたが、永瀬の方は今までの負傷で身体も弱つて居たから、間もなく絶命したけれども、林の方は永瀬の突き出す力の足らざりしものか、急所を外れて死に遅れ、餘りの苦しさに、八「誰れか……誰れか介錯……、介錯頼むツ頼むぞツ」○「オ、林か、拙者が介錯をいたして遣る、待てツとスツと、立ち上つたのは野村駒四郎と云ふ少年、林八十八の背後へ廻るや否、駒「エイツ」と一聲水も堪らず林の首を前にサツと切り落とし、自分も續いて腹を切つて絶命する、是れを始めとして其他の少年も、

皆相前後して卑怯未練の振舞なく、此の山上に壯絶悲絶なる自殺を遂げた、斯く十六人の少年勇士が、皆花々しく自殺した處へ、同じく白虎隊の池上、伊藤、石山、津田と云ふ此四人は、先きに瀧澤峠にて官軍に遮られ、他の者は戦死したのを、四人のみは辛くも切り抜け、辿りたつて漸やく此の飯盛山上に来て見ると、草は鮮血に塗れて唐紅ひ、死屍は狼藉、目も嘗れない悲惨な有様に、四人も又其跡を追つて自殺を遂げた、嗚呼斯くして二十人の少年烈士白虎隊の一部は、遙かに宗社を臨んで國難に殉じた明治初年の大悲剧、壯烈一鬼神を哭かしむる飯盛山上の有様は、實に斯かる懸壯極まる一條であつた、今此山上にて自殺なしたる少年の姓名は、

篠田儀三郎
井深茂太郎

十七歳
十六歳

石山虎之助 十七歳
伊藤 俊彦 十七歳
石田 和助 十六歳
池上新太郎 十六歳
伊藤 悌次郎 十六歳
林 八十次 十六歳
西川 勝太郎 十六歳
津河 喜代美 十七歳
津田 捨三 十七歳
永瀬 雄次 十六歳
野村 駒四郎 十七歳

の二十名です

○蘇生したる烈士飯沼貞吉

處が白虎隊の其の可愛き兒を遣したる家は素より君國の爲めに捨つる命

- 築瀨勝三郎 十七歳
- 築瀨 武治 十七歳
- 間瀬源七郎 十七歳
- 有賀織之助 十六歳
- 安立藤三郎 十七歳
- 鈴木 源吉 十七歳
- 飯沼 貞吉 十六歳

は惜しまれども、流石に親子の情愛として、決して悲しくないことばはない、
 今頃は何處に在つて、血刀を揮つて縦横無盡に戦争をしているであらうか、
 將又何處の野邊、何處の山上に其屍を晒してゐるであらうか、天晴れの功
 を樹て、潔く君國の爲めに討死をなしたか、或は子供心に門出に教へた
 言葉を忘れて、卑怯未練の舉動をせざりしかと、十人十色で様々さ心を碎
 き心配をした其中にも、同じく白虎隊の一人たる印山某の母にして、印山
 新藏と云ふ人の妻は、吾子の何時までも歸つて来ないの心配し、彼方此方
 の山中、或は谷間杯を尋ねて、今日しも此の飯盛山に来て見ると、無慘
 にも悲壯にも、花ならば苔さも云ふべき紅顔の美少年二十人は鮮血にまみれ
 て眠ひの末、潔く自殺をなし、死屍は縦横に狼藉として血は河の如く流れ
 何れも遙かに若松城の方に首を打ち伏せて死せる、悲壯絶倫なる舉動に、

ハツと胸も張り裂くばかりの思ひをしながら、印出の妻は心の中に「妻もしや吾が子も此の中に、花々しき討死をして居るのではなからうか」とそれやそれやと死骸を取検べて行くさ、吾子の姿は見へずして、不思議や其内一人の少年は、未だ幽かに息が通つて○「ウーム、ウーム」さ夢中で呻いて居る有様に、驚きながら駈け寄つたる印出の妻は、鮮血の衣類に着くの介意はず妻「コレ貴郎、確乎なさい、確乎成さいよ」さ直ちに抱き起して手拭を以つて血を拭ひ、自分の帯揚げを解いてシツカト傷口を括り、尙様々さ介抱をするさ、幸にも此の少年は急所を外していたものさ見へ、未だ死に切れずにて、身体には少しの温味がありましたから、尙介抱の手を盡して幸くも氣付薬を口中に押し込み、甲斐なくしく水を汲んで口移しに飲ませまするさ、暫らくして少「ウーム、ウーム……」さ僅かに唇を動かした妻「

オ、扱てはお氣が注かれましたか、確乎なさい、サア妾しが負ふて上げませう、確乎り成さい〜」さ氣を勵ましたつゝ、其の近傍にあつたる炭焼小屋に運び入れ、自分の上着を脱いで是れに着せ掛け、急ぎ山を下つて醫者を呼び再び山上の炭焼小屋に参り醫者と共に療治に掛つた時には、生運のあつたものか此の少年は、氣分も次第に確かにになり、従つて傷の痛みは甚だしく、少「ウーム、ウーム……」さ苦痛に惱むばかりであるから、未だ充分に言葉が発することが出来ない、そこで印出の妻と醫者とはいろ〜さ相談して、交る〜に此の蘇生した一少年を背に負ひ、段々山を下つて来たが、何しろ城下は此の時兵火に罹つて炎さ燃へひろがり、何處まで焼けて来るやら判らない位ひだから、仕方なく山路を辿つて鹽川さ云ふ處にいたり、更らに喜多方の庄屋の家に頼んで負傷者を此の家に置き、手を盡して介抱し、醫者

は又傷の療治を手厚くしたので、始めて確かに氣を取り直した。是れが即ち有名なる飯沼貞吉で、後年貞雄と名を改ため、近年まで長く遞信省の或る課長を務めて居た人だ、斯かる手厚き介抱を受けたる貞吉は、愈々人心の儲かさなるに連れて、城下の様、其他同志の人々の悲壯なる最期を聞き一層口惜しく思つて、寧じ蘇生をしなければ、此の様な情けない事はあるまい、只一人生き返つたのは死したる戦友に對し申譯がないと云ふので、無念のあまり幾回もなく自殺を企てたが、其の都度側に付いて居る人に止られるのさ、且つは父母の安否を知りたさに、其儘此の庄屋の家で空しく闊々の日を送つて居た、スルト此方飯沼貞吉の家では、日新館で主人の貞吉に別れた彼の忠僕藤助は、其の翌日になつても貞吉が歸つて来ない斗りでなく、行方さへも判らなくなつたから藤助は心の中に藤萬一や若葉は

日頃のお話しの如く、深く討死でも成されたのか、然うさすれば悼ましき限りである」と思ひながら、其れでは切めて其死骸なりとも見届けて一偏の回向でもして差上げ様と考へ、征討軍の警戒殿しき中を密かに潜り抜け瀧澤峠より戸の口原へ掛けて彼方此方、山と言はず野と云はず、手の及ぶ限り足の及ぶ限り探したが、何うしても見當らない、殆ど今は途方に暮れて居た時に、白虎隊の少年烈士は大分飯盛山で切腹したと云ふ噂を聞いたから、藤助は急ぎ途を變へて飯盛山に登つて来て見ると、此處にも主人の死骸は見えないから、茲にいよく訪れる便りを失なつたが、忠僕藤助は主人の身を思ふ一念より、尚種々の危険を犯して、至る處で貞吉の行邊を探して居る其内、圖らずも喜多方の庄屋の家で、飯盛山で自害した會津白虎隊の一少年が、蘇生して養生をしていると云ふことを聞き、なほ能く

一五〇

聞き糺して見るさ、是れぞ全く自分が日頃片時忘れず尋ねている飯沼貞吉なる事が判つたから、藤助は天にも登る喜びにて、急ぎ其れへ尋ねて行つて見るさ、貞吉は九死一生の難關を経て、漸やく命丈け取り止めた事故、驚れ衰ろへて實に見るも痛々しき有様に藤助は悲しくも又嬉しく、主を思ふ忠僕の一徹のせきくる涙を辛くも押へ、主從茲に再び面會することが出来た、其處で貞吉は先づ藤助に向つて父母の安否を尋ねて見るさ、飯沼の家内は皆會津城中に在るさ云ふ事に始めて安神をなし、種々其後の事を相談の上、貞吉は藤助と共に機會をばかつて城中に這入り、會津落城の時まで城中に止まつて居たのであります、是れに依つて實は飯盛山上の露と消へた白虎隊の勇士は、以上十九人ばかりであるか、尙此の他にも戦場で花々しき最期を遂げた同隊士もあれば、又今日まで生き長らへて居る人もある、就中

砲煙彈雨の中、處々に轉戦して最期を遂げた勇士の事蹟は、遺憾ながら是れを取調べることは出来ないが、白虎隊の少年烈士は單に上述の十九人に限るのではない、前に述べた如く會津藩が始め防禦の手分けは、先づ軍隊を朱雀、玄武、青龍、白虎の四隊に分けたので、中にも玄武は老人を以つて編成せられ、白虎は少年を以つて編成せられたので、此の又白虎隊の中には士中白虎隊と、寄合白虎隊とがあつた、一番の中隊は三十八名で、總中隊は合計二百五十二人さ云ふ多數の人で編成されていた、其内寄合白虎隊の方は、早く越後口の方に出陣して居たので、士中白虎隊は留守隊のごとく如きかたちになつて居た、然るに茲に士中白虎隊の中一番中隊は、時しも明治元年八月二十二日、隊長春日和泉の宅に集まつて、同夜一同は此隊長の宅で出陣の準備をなし、翌二十三日の未明、隊伍整々として勇まし

一五二

き興波の聲と諸共に、東方慶山村の方面に向つては進發したが、此の間にも官軍は處々に陣營を構へて居つたので、行く途次屢々征討軍と衝突し皆花々しき勦らきをなし、或は敵軍の爲めに無慘途傍の草を鮮血に染めたるものも澤山にあるが、其の彈丸雨飛、砲聲は地軸を動かさん凄まじき間を物ともせず、死物狂ひに進みくんで漸やく愛宕山上に攀じ登つて来た。此の隊も生憎く隊長と途を別れてしまつたので、愈々愛宕山に登つて一隊の人数を數へて見ると、僅かに十七人残つて居たばかり、一同は劍を抜いて遙か西方を眺むれば、今や會津城下は官軍の爲めに取り巻かれ、硝煙天を襲ふて日光くらく、火花の如き砲彈の飛び交ふことは手に取る如く、山岳を動かす砲聲は轟々として、僅かに高き會津城天王閣の一角は、空に白く見へるばかりで、早や既に落城するかと疑はるゝのみ、其處で一同の烈士

一五三

は怒髪天を衝いて無念の齒嚙みをなし、種々打寄つて評議をこらしたがり、是れもさきに飯盛山上に於ける白虎隊烈士の考へと同じく、進むに策なく、退くに途なく、進退茲に谷まりて皆黙然と無念の眉尾を吊り上げて居る。此の時一人の少年は一聲高く少「アイヤ各々方、斯くなる上はいたし方なし、皆諸共に此の處に於て潔く自殺をなし藩國の難に殉じ様ではないか」一人が云ひ出すと他の人々も、同じ思ひに同意して、丁度春日和泉の下男が此の隊に従がつて来て居るのを幸ひと、皆々持ち合せの金子、又片身の品を興へて、後の事を頼まうとするさ、春日の老僕は是れを止めて、老「イヤ、皆様、決して逸まる處ではございませぬ、往昔彼の源頼朝は九死の中を逃れて一生を得、遂に平民を全滅したのではありませぬか、皆様が方もこれにならつて、他日の再擧を謀り、會津藩の爲めにお力を盡されるが

一五四
宜敷からうご考へます、死は一旦にして易く、生は萬代に得難しとやら、下男の身として生氣意な申し分で、ございまするが、何うか御自害又は思ひ止まつて下さいまする様、殊に若松城を守つて居る官軍は、未だ城下を立ちさつて居りませんから、何處かに身を秘ませて再擧をばかつて下さいと老眼に涙を湛へて止めたので、十七人の少年烈士も、如何にも道理なる言葉に動かされ、遂に此の愛宕山を退ぐことに成つた。

○越後口白虎別隊の最期

其處で愛宕山を去る十七人の少年烈士は、此の山より路を東南に取つて、山を辿り谷を越へ、遂に羽黒山上に登つて、其れより東山村の湯本に下り、湯の入、川谷村杯に進んで居るを、圖らずも今大平方面から退城する會

津勢に出遣ひ、共に入城したのであるが、此の十七人の中には、現に生き永らへている當年の少年烈士が幾人もあります、又此の一隊の外、彼の越後口で戦死したる同隊烈士の名前の判明して居るのは、

- 西村 四郎 十七歳
- 佐久間直記 十七歳
- 坂井 源吾 十六歳
- 星 八彌 十七歳
- 星 勇八 十六歳
- 若林八次郎 十六歳
- 芳川瀧三郎 十六歳
- 高崎殉之助 十六歳

- 安惠助三郎 十六歳
- 山本 太郎 十七歳
- 藤森八太郎 十六歳
- 小松八太郎 十六歳
- 遠藤嘉龍次 十五歳
- 青山重之進 十七歳
- 岸 彦三郎 十七歳
- 百瀬外次郎 十七歳
- 關原重太郎 十七歳
- 鈴木 五郎 十七歳
- 鈴木 平助 十六歳

等の二十士であるが、此の人の生、或は門出の模様も一々述べて見る。彼の飯盛山上にて花を散つたる十九烈士にも決して劣らない逸話がある、併し是れは先きを急ぐ故、略して置く事にいたしました。彼の飯盛山にて自殺したる二十人の烈士が、相携へて主君の安否を伺はむ。若松城中を差して立ち歸る途次、瀧澤峠で征討軍の爲めに途を遮ぎられ、將に最期の場所たる飯盛山へ登つて行く此時、此方若松の本城では、遊軍の敢死、白虎の三隊が奮戦力闘も其甲斐なく、味方は散々の敗北で、官軍の砲聲は刻一刻と近くなつて来たから、藩主松平容保侯も愈々出陣を決心し、桑名の城主松平定故、田中土佐、神保内藏之助、佐川官兵衛、岡本武雄、小山正武杯を従へて、潮の如き征討軍を瀧澤峠で防がんとし

樋口勇四郎

十六歳

て出陣をした、時は惟れ八月二十三日の未明、朝霧は未だ全く晴れ渡らぬ中を、ジツと眸をてらして瀧澤峠の絶頂を眺めるさ、今や征討軍の征旗は驍がへつて翻騰と、撃出す砲聲は轟々、殷々、硝煙漠々として天日爲めにくらく、其れに引換へ味方の敗兵は、刀を杖に踰跟く、續々として峠の半腹を雪崩の如く下つて來るので、會津藩士に其人ありさ聞へたる豪傑佐川官兵衛は「官シヤ物々しき敵の舉動、イテ此上は……」と率ひたる兵さ、逃れて居る敗兵を指揮し、自から大剣を抜いて眞先きに立ち、摩利支天の荒れたる如く、彈丸雨注の中を抜けつ潜りつ、此の峠を取り返さんとしてズラズラく、官、進めーツ、くツーさ山上に駆け登つて死戦したが、征討軍は山上より釣瓶撃ちに打ち出す大砲、小銃、殊に勝ちに乗じた萬千萬の精兵の勢ひ猛烈にして、却て打ち破ることは出來ないから、急に踵を返して麓

の方に引返し、其れに大砲を据へ付けて山を下つて來る征討軍を喰ひ止めようとしたが、何日の間にか征討軍の内二隊は、間道を抜けて早や其背後に迫り、一せいで射撃に會津勢をのぞみ、ド、ド、ドツと撃ち出したから、さしもの會津勢も、全く此の不意討ちに散々の敗北を取つてしまつた、是れはまづた、當時官軍の參謀たる伊知地正治が、先達で石蓮口を破つた時、其の配下の者を撰んで、商人、或は農民に扮装せて若松城下に入り込ませ、密かに間道や城下の様子を委しく調べさせていたので、征討軍が今日しも瀧澤峠に押し寄せた時、其の間諜が官軍に歸つて、藩主の出陣やら又は間道のこぼ杯を残らず報告したので、伊知地正治は直ちに二隊の兵を間道より攻め寄せさせ、其れに依つて双方より狭み討ちの計略に掛けた、今しも會津勢は腹背に敵を受けて、散々の敗北になつたから家臣の一人河原善右衛門

は、藩主松平容保侯を勸めて辛くも城内に逃れさせ、自分は愛児二名と共に殿りとなつて防戦しつゝ、容保侯が無事入城したのを見て、親子三人潔きよく其處に戦死を遂げた。此の河原と云ふ人は、始めから藩主容保公に勤めて、固く恭順説を執つて居りましたので、血氣に逸る藩士仲間からは、臆病者くそ言はられて居たが、其間善右衛門は決して一言の云ひ譯けもせず、今日しも藩主の出陣を聞いて、吾が本心を示すは今日此時なりと、父子三人が藩主の身代りとなつて戦死したのであります。其れで河原の家族の人々も其後、征討軍が外廓へ押し寄せて、兵火の爲めに其家が焼けることした時、敵に捕はれて耻辱を受くるよりは、寧ろ潔く殉死をなさんと老婆と少女は懐剣を以つて自殺してしまつた。又神保某、田中某と云ふ二人の家臣は、此の見苦しき敗戦に及んで、両「吾々」開戦を主張したるもい

此期に及んで何面目あつて城中に入る事が出来様、一死以つて吾が罪を謝するのであると云つて、此瀧澤峠の下で切腹をして相果てた。斯くして東北の雄鎮と聞へたる若松城も、日々に其の防禦を破られて、孤城落日の憐れなる有様となつたが、此瀧澤峠の敗北後、征討軍の土州兵は第一に大手門前に攻め寄せた、此處で又妻まじき大激戦となつて、征討軍の方では土佐の牧野群馬、三原鬼彌太、小笠原某、大垣の戸田五郎左衛門、古田彦三郎、太田七十郎、奥宮元三郎等の討死となり、會津方では嵯川友次郎、田原助左衛門、佐瀬清五郎、井深數馬、馬場清兵衛、黒河内式部等、前後して戦死した。此の前に彼の西郷頼母の一家族は、皆悲壯な最期を遂げたが、西郷の一門が悲惨なる最期を遂げて後、同年九月七日にいたつて若松城の西、鹿方村の山中に自殺した婦人の一群があつた、是れは南摩彌左衛門と

町田主水さの二家族であるが、是又一場の一悲劇であります、

○勝方山上烈婦の憤死

此の南摩さ云ふ家は、會津藩の大砲隊の組頭で、彌左衛門の外に六人の兄弟があつたが、此の兄弟の内、數、莊司の二人の弟は、彌左衛門に従つて白河口に出陣し、四番目の弟節は、其當時僅かに十五才の少年であつたから、幼年組となつて若松城内を守り、家には本年九才なる壽さ四才になる辛さ、其母の勝子、並ひに彌左衛門の妻房子、及び其の長男萬之進さが残つて居た、處が其當時房子は更らに一子を産けた時であつたから、八月二十三日に征討軍が城下に押し寄せた時には、未だ産褥に居て、其上さきに出征していた莊司は、白河口の激戦に左りの股を撃ち貫かれて歩

行ことさへ出来ないから、家に歸つて其療治をして居つたが、今日しも城中にはサヤーン／＼／＼と早鐘が聞へるので、勝子は下男の清藏さ云ふのを對手として、駕籠に莊司を乗せて他の下男に是れを擔がせ、産褥の房子は嬰兒を懷中に入れ、南摩家の系圖の一卷を持ち、勝子は壽、辛、萬之進の三人を連れて、諸共に會津城中へ這入らうとしたが、早や時遅れたか城門は既に閉されて這入ることが出来ない、仕方がないから又もや自分の邸に引返そうとして近くまで歸つて來るさ、前に進んだ駕籠の中より、莊司は苦しげなる聲を擧げて「庄」水……、水……」と云ふ聲が聞へた、ハツと思ひながら勝子はバラ／＼ツと駈け寄つてズツと駕籠の戸を開け中を見るとき、早や何時の間にか莊司は腹を切り、鮮血に塗れて呻きながら、夢中で「庄」水……、水……」と云ひながら、未だ釋れないであつたから、アツと斗りに打ち驚る

一六六

が、斯く毎日の敗軍では、モウ此の世の望みもスツカリ絶へてしまひましたから、生き永らへた處で其甲斐がありませぬ、依つて一同潔く自害をした方が宜いかと思ひます」と云ふと、町野の人々も豫て未は斯くぞと覺悟をして居りましたから、折りを見て諸共に此世を去らんぞ約束をしたが、彼の房子ばかりは南摩家の世嗣を擧げた大切な身体、殊に是れを殺すは不愆である。モシ幸ひに一命を全くすれば、兎も角も南摩家の跡を絶つことは、あるまいと云ふ考へから、何うかして房子を早く逃れさせ度いと思つたけれども明白に此の事を云つたならば、到底も房子ばかりが獨り立ち去ることはあるまいと思つたので、遂に相談の上一時房子を欺むく事とし、或日勝子は窺かに房子に向つて勝「コレ房子、斯く家内の者は諸共に城下を隔れて、早や十日斗りも旧を経たが、一向に嬉しい便りも聞かず、又聽て此の山中にも無

一六七

論敵兵の乗込んで来るは必定、モシ然うなれば其時は、尙ほ奥深く山中に引籠るより外宜い工風もあるまい、其れに就いてお前は産後の日も經たず、此の上難義を重ねては到底も叶ふまい故、早く身を忍んで城内に這入り、手傷をして居る彌左衛門の看護をして遣るが宜からう、房子は悲しき聲を絞つて房「妾しも是れまで貴女様と共に是れまで參つたのですから、妾しばかり一人お別れするさ云ふ譯には參りませぬ、何處までも母様と一緒に……勝「イエ、お前に萬一の事があつては、此萬之進や嬰兒も可愛そうであるから、是非二人を連れて城中へ行くか宜い」と種々言葉をつくして諭されたので、房子も今は返す言葉なく、仕方なく萬之進と嬰兒を連れ、系圖の一卷は相變らず懐中深く治め、忠僕清藏と諸共に此の勝方村を立ち出で官軍の隙きを規つて無事城内に這入り、遂に良人の彌左衛門と久し振りの對

面をした、此方勝子等の一同は、涙ながらに房子を送り出したる上、其翌朝未明に起き出で、町野の家族と共に勝方村を去る半里斗りの山中に出て参り、南摩の家族四人、町野の家族七人が、互ひに水盃を取り交し、遙かに若松城の方を伏し拜み、潜々たる双眸に心を鬼にして勝子は、今年九才に成る壽を引寄せ、懐劍ギラリと引抜いて、既に刺さんとする此時、壽は勝子の手に縋つて、其の顔を見上げ壽母様、私しは討死なれば本望でございますが、今此處で阿母様の手に果てるのは残念でございます」勝子は健氣なる吾が子の志しに動かされ、ハツト堰き涙を辛くも飲み込み、懐劍握る手もピリ／＼と慄はせながら、シツと吾子の顔を見下して居りましたが、斯くては果てじと氣を取り直し、心を鬼にして勝「許せよ壽……」と云ふより早く、一刀グサツと胸元を貫けば壽「ウームツ」と一聲

早くも息は絶へ果てた、返す刀で勝子は辛を引寄せ、又もや一刀に刺し殺し其後自分も潔よう自害をしてしまつた、是れを始めとして都合十一人の人々は、空しく此の山上の露を消へ果てた、前には飯盛山上に於ける白虎隊烈士の白刃、今は勝方山に於ける烈婦の自殺、思ふに明治維新の犠牲となつた一對の悲壯なる物語りであらう、然るに勝方山に此の惨劇なる一幕の悲劇ありとも知らず、忠僕清藏はさきに房子と其子を送つて若松城に入る途次、圖らずも房子の姿を見失なつて大いに驚き、彼方此方と心當りを探したが、何うしても見當らなかつたから、今は是非なく勝方村を差して急ぎ引返す途中で、町野家の下男に出會ひ、始めて此の惨劇たる一同の最期を聞き、ハツと斗りに驚き、殆ど絶へ入るばかりに泣き悲しんだが、今は如何とも詮術なく、只一人勝方山上に登つて自から王家の者、又町野家一

同の死骸を葬り、自分は程近き彈寺に入つて出家を遂げ、一同の人々死後の冥福を弔つた云ふ、

○烈婦中野竹子の殉難

扱て斯くして愈々征討軍が若松に討ち入つた時、白河口、日光口に出陣をして居た會津勢は、本城の危急を聞いて駈け付け、入城した者が二十三日より二十五日、つまり三日の間に二千餘人、中にも小原砲兵隊が廓の内に這入らうとした時には、征討軍が廓内に早や立て籠つて居たから、廓の門を内から閉して、外廓、土手の上から防戦するので、流石の砲兵隊も持て餘して居るさ、會津勢の内木村某と云ふ勇猛なる一武士は、手槍を土手の土に突き立て、ヒラリ門内に躍り込み、ドツと寄せ來る征討軍を、彼方に防

ぎ此方に突き伏せ、宛然ら猛虎の群羊中に荒るゝ如く、餘りの凄まじさに征討軍、一時サツと引き退ぞく隙を覘つた木村某は、手早く躍り込んで美事に廓の門を開いたので、ドツと斗りに待ち受けたる會津勢、一時に槍襖をつくつて廓内に入つた、併し此時廓内に在つた征討軍は、此處彼處の門内、或は垣、壁の間から絶へず會津勢を覘ひ討ちにするので、隊長兄弟は無念にも此處で勇ましき戦死を遂げ、城内に這入つた砲兵隊は、僅かに總數の半分に過ぎなかつた、此の砲兵隊に引續いて三代口に出陣して居た會津勢は、總大將原田對馬等に率られて、千五百餘人が隊伍堂々として、三の丸不明門から城内に這入つた、此時日光口の守將山川大藏、(浩)も引續いて無事に入城したので、城内は大いに力を得た、併し尙池口出陣して居た會津勢は、所々方々に澤田あつたので、至る處で官軍と衝突し

一七二

戦隊は會津平原より山を越へ谷を渉り、非常に擴がつて居る上に、會津城内に入り遅れた人々、及び其他婦女子の如きにいたるまで、三人五人、或は十人、近き處の會津勢に加はつて征討軍と奮戦した其壯烈なる事は、誠に神州に血を受けた者と思はるゝのであります、就中最も壯烈であつたのは、八月二十五日、越後を引揚の會津勢が、柳橋の官軍と鎬を削つて奮闘した時に、中野竹子杯と云ふ米婦が、長州勢に向つて決戦を試みた事である、此の竹子と云ふ女は、其父中野平内が江戸詰の時、江戸の會津藩上屋敷に産れて、幼少の時より其伶俐なること珍らしきばかり、殊に容貌も美しく、藩士赤岡大助と云ふ人に就いて讀書、或は薙刀の術を學び、此の年の春に江戸屋敷を引拂つた時、父は赤岡等と共に會津へ歸つたので、其家へ竹子は妹の蝶子と共に、相變らず武藝を修めて居つた、竹子は此の時

一七三

薙刀の免狀を得、妹蝶子も又非常に熟達して居つたので、會津藩士より縁談を申込まれたことは度々であつたが、何か自分に考へることがあるさ云ふので、何處から來た縁談も悉く謝絶し、只自分の行狀を謹んで居たから、會津城中城外で評判の姉妹であつた、其内に世は次第に騒がしく成り會津の國境も愈々事ありさなつたので、家中の婦人杯は互ひに相戒しめ益々武藝を勵んで萬一の用意をして居た、スルト茲に竹子の友達で、依田某と云ふ同じく妙齡の婦人があつたが、此の女も又其心雄々しく、武藝の嗜み深かつたので、殊に其父が豫て伏見、鳥羽の戰爭に戦死を遂けたので一層奮慨の心を起し、竹子姉妹と共に赤岡に就いて武藝を修め、其仲が非常に宜かつたのだ、處が或日竹子は赤岡處で武術修業をしている女の友達に向つて竹「扱て皆様、今日の如き騒がしき世となつては、妾し共も女子

一七四
 さは申しながら、藩中の安危を只安閑と見て居ると云ふ譯には参りますまい、何うか妾共も昔しの勇婦烈女に劣らぬ働らきをして、天晴れ一廉のお役に立たうではございせんか」と勇ましく云ひ出したので、依田の娘等も大いに其言葉に感じ、一同萬一の準備に怠らなかつたのでございませぬ此の一群の同志は、依田の娘を始めとして、同藩士岡村武太郎の妻、神保園子等の烈婦二十餘名、當時婦女子の武藝と云つては、薙刀と大刀打ちの二つばかりであつたが、會津には山川並びに山本覺馬杯と云ふ砲術家があつたので、覺馬の妹八重子（是れは後に同志社校長新島襄の妻となつた人）等は、女ながらも充分砲術を修めて、他の婦人にも教へていたから従つて同藩では武藝に長けた女が澤川にあつた、其内に愈々八月二十三日、征討軍は、潮の、城下に攻め寄せたので、竹子等の婦人隊は直ちに出陣し

一七一
 やうとしたが、何分征討軍の働らきが早かつたものですから、其機會を取り失ない、邸に止まつて自害する者もあれば、城中に入つて籠城の中に這入るもあり、又は田舎に逃れた人もあつた、此時中野竹子の姉妹は、征討軍愈々討入りと聞いて、豫て用意の衣服を取り出し、義経袴に大刀を帶し、薙刀を小脇に振ひ込み、ドン／＼／＼／＼城內差して駆け付けたが、此時早く城門は鎖されていたから、姉妹は引返して戻らうとする、追々駆け付けて来た同志の中、依田の娘、神保園子、竹田すま子等が来たので、豫ての約の如く征討軍と花々しく戦をうさしたけれども、何分此日は非常に身体が疲れ、且つ小勢であつたので漸やく思ひ止まり、大川を渡つて阪下の驛に行く、幸にも越後から引揚げて来る會津勢に出會つた、此の會津勢はまさに本城が危ふいと云ふのを聞いて、衝鋒隊を先鋒とし、町野隊、結城

隊にこれに従ひ、阪下まで戻つていたので、竹子は同志の婦人隊十名ばかりを率いて町野隊の陣營に歩つて参り、隊長に會つて従軍させて貰ひたい旨を述べ、竹「妾し共は親を討たれ、又良人を討たれ、兄弟を失ない歸るべき家を焼かれて誠に頼みないものでありますから、何うか貴郎方の隊に従つて征討軍の一人なりとも斬つて捨て、切めては親や良人の怨みを晴したうございませう」と固「頼み込んだが、隊長は其の勇ましき心に感じながらも、女の従軍は許すことが出来ない」と云ふので、長「其許達ちの志しは誠に殊勝ではあるが、古へさ違ひ今日の戦ひは大砲、小銃の戦ひで、婦人が働らく扱さ云ふ事はないから、何うか其志しは止まつて呉れる様、殊に軍中に婦女隊がある扱さ言つて征討軍に笑はれては、會津勢の面目に關はるから、何れへか身を忍ばせて居らるゝ方が宜からう、其許等の敵は及ばずながら吾々一同が

必らず斬り拂ふ事にする」と申し聞かしたが、只一圖に思ひ込んだる竹子等は更に聞き入れる様子もなく、再び言葉をついで、竹「仰せ誠に御道理ではございませうが、妾し共は今更ら志しを變へるさ云ふ譯には参りません、又陣中に婦人が居つては如何がと存じ、其れが爲め斯く髪を束ね、男の装ひをいたして居ります、何うかまげて御許しの程を願ひ度う存じます、長「イヤ何と云はれても婦人を陣中に入れる事は出来ない、左様な事を云はずと、何處かへ身を忍ばれたが宜からう」と云つたか、却々竹子等は歸らうとは云はない、竹「折角此處までお願ひに参り、お聞入れが無いからと申して、今更らオメく立ち歸ることは出来ません、何うしても相叶ひませぬことならば、妾し共一同此處で自害をして、君國に盡す赤き心を示しませう」と將に一同自害をせんと云ふ勢ひであつたから、今は隊長も止むを得ず是れを許すことに

なつた、斯くして竹子等の婦人隊は、先鋒衝鋒隊に加はつて、二十五日の朝阪下驛を出立し、越後街道の草木に當る秋風を身に受けながら、勇みに勇んだ婦女隊は、征討軍を目掛けて進撃した、此時阪下驛の向ふ柳橋口は、征討軍たる美濃大垣、並びに長州の兵が陣取つて、長州方には有地品之丞、原田良八、大垣方には九鬼圓之助、河合勘十郎杯の勇士が控へ、敵に一步も踏み込まざりし防戦する、聽て兩軍間近く交戦するに及んで、萱野權兵衛の卒いたる會津勢の一隊は、米澤街道より駆け付けて、横嶽に征討軍を砲撃し、戦争今や酣ならんとするや、婦人隊の一同は今日の初陣にきたなき振舞あつては、町野隊長等に對して面目なしと、互ひに勵ましながら彈丸雨飛の其中を、ドツと敵中に駈け込んで、薙刀を水車の如くに打ち振り、彼方此方に征討軍を切り拂ひ薙ぎ拂つて居たが、

今しも飛び來つた一發の流彈は、憐れ竹子の胸部に命中し竹「アツ」と一聲ドタリ其處に絶命し、續いて此時神保園子も戦死を遂げた、會津勢も此の初次第に討ち退けられたので、残る婦女隊も共に高瀬村まで引揚げた、處が此翌日津川に陣取つていた會津勢も高瀬に來り、軍事奉行柴太一郎も是れに加はり、高瀬の近傍に陣取つて居た萱野權兵衛等と共に其處に陣取つて居るさ、偶然依田某の父が若松城から使者として來た時、萱野は婦女隊を其れに呼んで面會するさ、其の扮装は種々様々で、衣服は血に染みて唐紅に變じ、初陣の手柄は云はすも薙刀の色に残つて居るので、萱野權兵衛、柴軍事奉行其他の人々も、流石猛烈なる婦女隊の働きを聞いて、大いに感心をしたと云ふ、其内に萱野は婦女隊の手柄を口を極めて賞めそやし權「其許違ちが天晴れなる働らきは、君侯のお耳に達したら嘸御満足に思召すこまで

一八〇
ござらう、併しながら今日の實戦は大砲小銃の争ひで、婦人の功名をあらはす事は殆どないから、一時兎も角何處へなりとも身を忍ばせ、折りを見て城内に這入らるゝが宜い、婦人を戦場の露と消へしむるは、拙者共の本意でなく、殊に昨日の戦ひで其許達ちも日頃の志しも達したであらう」さ云ひ聞かされたので、女隊も今は隊長たる竹子を失なつた時であるから、其の言葉に従つて思ひ／＼に一先づ解散した。

○佐川官兵衛親子の壯烈

斯る内にも征討軍は、若松城をさして犇々押し寄せ、本營を市街中に置いて兵數は大いに加はり、薩摩、佐賀の別隊は會津城の東南なる小山田を乗取つた、此小山田と云ふのは本城を去る十町餘で、其處は一面の山上で頂

上からは城中を一目に見下す事が出来、會津軍の爲めには極めて大切なる要害だ、往昔會津の名家老田中三郎兵衛が死ぬる時に、其頂上に遺骸を葬られて、自分は死んでも魂魄は此の處に止まつて、永く若松城を守るであらう、後世の人々も田中三郎が此處に在ることを思ふて、決して此の山を忘れてはならぬぞと云ひ残した有名な處ですが、會津勢に此方方面に手ぬかりがあつたのを、早くも官軍は偵察し、急に攻め寄せて苦もなく乗取つた、乗取るさ又直ちに其麓にある會津の火薬庫を奪ひ取り、官兵は山下山上を固めて、日夜大砲を以つて頭上よりドーン、ドーンと、若松城を砲撃した、流石の會津勢も此の砲撃には大いに苦しみ、城中では原田對馬、内藤介右衛門、小森俊馬、佐川官兵衛、山川大藏杯と云ふ一騎當千の猛將が打ち寄り、毎日の如く軍議を凝らして、「斯く毎日續けさまに砲撃されながら、只手を

空しくして籠城しているのは誠に宜敷くない。其中には必らず日光の備へも破られ、敵兵が南方から攻め寄せて来た時には、本城は忽ち四面に敵を受け、愈々難義なことになるから、今日の處先づ城中より進んで急に敵陣を攻め、勝負を一戦に決するが宜い、其れに依つて幸ひに敵軍を破ることが出来れば、越後口其他の味方と聯絡が開け、敵軍を遙かに追つ拂ふことが出来る。茲に評議は是れに一決して、愈々城中より出陣することに成つたが、其の大將として佐川官兵衛が撰み出された、此の佐川官兵衛と云ふ人は、彼の鳥羽、伏見の變よりこのかた、征討軍にも會津に佐川ありと知られて居る位ひの猛將で、母は年五十餘才で山川大藏の母と共に、會津藩の二賢母と云はれたもので、數日前に早鐘の音を聞いて城中に駆け付けんとする時折悪しくも雨がザア／＼ツと降り出したが、何しろ咄嗟の場合で到底も雨傘

杯の用意をする事が出来なかつたから、取り敢へず有り合したる吳座蓮を頭から引冠り、屋敷を出て、スタ／＼今しも城門近くに歩つて来るさ、是れを早くも見たる征討軍の一人は、バラ／＼／＼ツと駈け付け、突然り大喝一聲、兵「コリヤ待てツ」怒鳴つて抱き止めた。ハツと驚きながらも流石は佐川官兵衛の母「何を小癩なツ……」と振り向き様、帯の間に狹んで居たる懐劍ズラリと抜き放ち、逆手に持つて力限りに後邊から組み付いたる彼の官兵の、脇腹臨んでグサツと斗りに刺し通した。不意を喰つて何堪らう兵「ア、ツ」云ふなり其れへドタリ打つ倒れる奴つを、莞爾り笑を含んで靜かに吳座蓮で懐劍の血を拭ひ、ピタリ鞘に納めて悠然として城に入つた。斯の様な氣丈な母親さ、勇壯なる氣象の父に育て上げられた佐川官兵衛は、今度出陣の大將に撰まれて、勝敗を一舉に決し様と云ふのであるから、大

いに勇み立ち、先づ城の西北に陣取つたる長州、大垣、備前杯の軍陣を攻むべく、八月二十九日を以つて愈々出陣の日を定め、城内にある諸隊の中から、千軍萬馬の間を馳驅して、充分實戦に経験の有る精兵を、自から一千餘人撰拔し、總攻撃隊を組織した、組織隊士に撰まれたる一騎當千の勇士は、愈々進撃の命を受けて大いに喜び、是れを最期と覺悟して、辭世の歌を詠じて遺すものもあれば、又大劍を抜いて慷慨悲壯の詩を吟ずるものもあり、何れも一死國難に殉しやうと固く覺悟をしているので、城中に在る婦女子も又其志しを壯にせんさ、是れ等勇士の爲め特は戎衣を縫つて贈り、勇士は皆其の背に墨黒々を、

慶應四年辰八月二十九日討死、何某生年何才、
 認め、充分討死の覺悟を示した、中にも三阪逸人と云ふ人は、

武士の強き眞弓をひくさきは、

かへらぬものさかれてこそ知れ、

と詠じた、殊に大將たる佐川官兵衛の父佐川幸左衛門は、其頃六十餘才の老年ながら、意氣少しも壯者にゆすらす、吾千官兵衛が愈々出陣の報を聞き、自分も覺悟を定めて官兵衛に向ひ幸「官兵衛、俺れも斯うして年は取つたが、未だ昔しの元氣は充分残つてゐるから、何うかお前の中に加へて従軍をさせて呉れないか、敵の生首の三ツや四ツを捉げて來るのは、何の造作もない」さ云つたけれども流石親子の情愛として、官兵衛は父の老体を案じ「官ハッ父上のお志しはさるこそながら、何分今度の戦さは皆決死の勝負で、誰れ一人として生還の望みはありませぬ、私しも日頃父上の御教訓に従ひ、君國の爲め眞先きに討死の覺悟でございますから、父上は何うか當城

中に居残つて、私に代りお家の爲め御盡力の程を、只管ら願ひ上げ奉ります。一と流石の勇士も親を思ふ一念より、強いて是れを止めますと、聞くより幸左衛門はクワツと怒り、幸「ヤア怪しからぬ只今の其の一言、其方平生の言葉にも實に似合ぬことであるぞ、武士が戰場に出で、生還を期する奴ツがあるか、假令ひ吾れは年老ひたればさて、出陣の叶はぬと云ふ筈は決して無い、白髪を染めて出陣したる齋藤別當は云はずもがな、先日の戦ひに高木新十郎殿は七十餘才の老体をもつて、大手門前に戦死を遂げ、其他多賀勝左衛門殿、辰野源左衛門殿、老年ながら其れに潔き討死をしたではないか、吾れ老年も未だ七十に達せず、戰場に出るのが何の差支へがあらうか、吾が家は元家格卑しかりしに其方の代にいたつて家老の重職にあげられ、佐川の一家が今日の名譽を得たるは全く御殿様の有難き思

召しである、然るに今日斯く危急の場合君恩を辨まへず、安閑と生き永らへて何とする、然う云ふ其方こそ家老の重職にある者なれば、輕々しく身を捨てることは不可ん、俺れは其方に代つて討死をする覚悟である、是れを見よ官兵衛……」と両肌押し脱げば這は如何に、白木綿の襦袢の襟に墨黒々
 慶應四年八月二十九日討死、佐川幸左衛門直清、生年六十五才
 と認められた、流石鬼神をも挫かん勇ある官兵衛も、是れを眺めては一言なく、只目に涙を湛へて、遂に共々出陣仕様と約束をした。官兵衛の母は三人の子の内、先きに二人を死なせて、残るのは此の官兵衛只一人であるが官兵衛を勵まして様々教訓した、其内愈々八月二十九日の當日が来るさ待ちに待つたる會津藩の猛將勇士は、今日ぞ吾が手並をあらはす時なりとあ

つて、千餘人は朝未明より起き出でたが、朝霧深く四面を閉じ、四方の山は云ふも更らなり、城下の町々、征討軍の旗影も見へない位ひ、其内秘かに準備充分に出来上るこ、官兵衛は右千有餘人の勇士を引卒し、隊伍肅々城門を出で、一文字に融通寺にご駈け向つた、此時藩主容保侯は世嗣喜徳侯と共に出陣の兵士を黒鐵門まで見送り、涙をたれて其勢を謝したので、隊士等は非常に感激し、征討軍を打ち退けざる其間は、生きて再び此城門を潜らじと決心して出陣に及ぶ。

○諏訪神社境内の大激戦

此時征討軍は融通寺町、西名古屋町の人家を残らず焼き拂つて、城下の西北方面を固めていたが、今しも攻撃隊は西名古屋町の裏手より進撃し、

ドツと斗りに長州、備前、大垣の軍を攻めつけるこ、心得たりと此方三藩の兵は、宛然ら震のごとく大砲小銃を撃ち出したが、攻撃軍は豫て覚悟のこゝろで更に屈せず、攻め寄せ、屍を踏みつ、奮戦力闘、遂に此處を陥れた、三藩の兵は仕方なく長命寺に退いて此の攻撃軍を防ぐ、此時大將官兵衛は攻撃軍を三隊に分ちて、右翼は赤井町の裏なる西光寺の墓石の間より、長命寺の表門を攻撃し、左翼は融通寺町の城安寺裏から押し寄せて、長命寺の墓の間から征討軍の背面を攻め、本隊は西名古屋町の焼けた民家より征討軍の右翼を攻撃し、進んで長命寺に入らんさ云ふ計略を立てた、征討軍は此處を先途と必死になつて、或は霰彈或ひは小銃を以つて、一生懸命攻撃軍の侵入を防いだれども、何しろ死物狂ひの攻撃軍が鋭き戦略に會つて、各々其場を捨て、逃げ出したから、